

筑波大学第三学群国際総合学類
卒業論文

変容する観光資源
ー北部タイにおけるトレッキングツアーの事例からー

2010 年 1 月

氏 名：北川 文香
学籍番号：200511103
指導教員：関根 久雄

目次

第1章 序論-----	1
1. 研究の目的-----	1
2. 研究方法-----	3
第2章 北部タイ山地民と観光-----	5
1. タイと観光-----	5
(1)タイの概要-----	5
(2)観光立国タイの観光政策-----	6
2. 山地民と観光-----	9
(1)北部タイの概要-----	9
(2)「山地民」の誕生-----	10
(3)山地民の抱える問題-----	13
1) 焼畑耕作-----	13
2) 麻薬栽培-----	14
3) 国籍の付与-----	15
(4)山地民観光とは-----	16
第3章 トレッキングツアーの実態-----	18
1. トレッキングツアーの誕生と変化-----	18
(1)トレッキングツアーの歴史-----	18
(2)ガイドの役割-----	20
(3)トレッキングツアーに参加する観光客-----	21
2. トレッキングツアーで語られる山地民-----	21
第4章 トレッキングツアーと山地民との関係性-----	29
1. トレッキングツアーにおける環境の変化-----	29
(1)ツアーのシステム化-----	29
(2)観光客が抱く山地民イメージ-----	30
(3)トレッキングツアーに参加しない観光客-----	33
2. 山地民と観光ミドルマンの関係-----	34

(1)観光客の変化による山地民と観光ミドルマンの変化-----	34
(2)タイ語と教育の普及-----	35
(3)山地民イメージの変化-----	38
3. 山地民にとってのトレッキングツアーの意義-----	39
第5章 結論-----	42
注-----	44
参考文献-----	47
英文要約-----	50
謝辞-----	51

図目次

図 1-----	5
図 2-----	10
図 3-----	24

表目次

表 1-----	7
表 2-----	8
表 3-----	11
表 4-----	22

写真目次

写真 1-----	13
写真 2-----	25
写真 3-----	25

第1章 序論

1. 研究の目的

1980年代以降、北部タイの山間部に住む山地民を観光対象とする観光が盛んに行われるようになった。彼らは中国雲南省やミャンマーを起源とする移動型（焼畑）、または定住型（常畑）の農耕民である。タイに住む山地民の中でも人口が多く、現在タイ政府によって公式に認定されているは、カレン族、モン族、ラフ族、アカ族、ヤオ族、リス族、ラワ族、ティン族、カム族の9民族である。これらの民族のほかにも多くの少数民族がタイで暮らしているが、彼らは「山地民」（チャオ・カオ）と総称されている。山地民は多数派民族であるタイ族（シャム人）の文化⁽¹⁾とは全く異なる独自の伝統的な衣装や生活スタイルなどを有している[豊田 1996:131]。たとえば、カレン族は筒状の貫頭衣を身に付つけ、それは結婚しているかそうでないかで色や形が異なったりする。またリス族は他の山地民に比べて非常に鮮やかな配色の衣装を身に付ける。また民族ごとに使用する言語が異なり、タイ国内の他民族とは独自の言語で話せないが、国境を越えた場所に住む同じ民族同士であれば通じる。さらに、彼らは焼畑農耕を行いながら標高の高い人里離れた山岳地帯に村を作って住み、農業を生業として生活している。このような西欧風の衣服とは全く異なる独特な衣装、そしてジャングルの中で自給自足の生活をしているという山地民の生活スタイルが、観光資源として観光の場面でしばしば強調・イメージ化されて、観光客にエキゾチックな印象を与えるために利用される。このように観光において民族独自の生活や存在そのものまでも、見られる対象となる観光形態をエスニック・ツーリズムという[石井 2007:13]。

現在、エスニック・ツーリズムに関しては、大きく2つの議論に分けることができる。ひとつは不均衡な社会関係の再生産を強調する議論である。つまり、観光対象である少数民族に対し、観光客とその両者を仲介する多数民族(以下、観光ミドルマン⁽²⁾)が優位に立つという、不均衡な力関係が存在することである。前述の通り、エスニック・ツーリズムにおいては、しばしば国民国家内部で周辺化された少数民族の生活の場が観光対象となる。それらの観光対象に対し観光客は、自身とは全く異なる存在であるという印象を前もって抱き、そしてその「他者性」を確認しに村を訪れるのである。また観光客は、その「他者性」が「本物」であることも期待しているという。こ

ここで言う「他者性」とは、資本主義のもとで物質に心を奪われ人間らしさを失いかけている我々先進国の人間にとっての、その生活とは全く異なる文化・社会のことである。つまり、観光対象となる少数民族は、観光客の抱く「未開」で前近代的（伝統的）な生活を営んでいることを観光客によって求められているのである[豊田 1996:132]。しかし、観光に組み込まれた少数民族が、実際に観光客のイメージ通りの生活を営んでいることはもはや稀である。そのため、観光に対して「他者性」を求める観光客を満足させるために、仲介者である観光ミドルマンが、観光対象となる少数民族の文化を操作・商品化し、提供している。豊田は、その観光対象となる少数民族はたいていその国民国家内において政治的・経済的に不利な立場にあるため、これらの観光の運営に対して発言権を持つことはほとんどないと述べる[豊田 1996:133]。

そしてエスニック・ツーリズムにおける2つ目の議論では、上記のような不均衡な力関係に対し、観光対象である社会が抵抗しているということが語られる[須永 2007:72]。この議論では太田の主張が主にとりあげられている。太田は観光システムが力の不均衡を内包していることを認めつつも、その劣位の立場にある観光対象が優位な立場にある観光客や観光ミドルマンに対して抵抗し、自らのアイデンティティを再形成しながらその力関係を中和させていく余地のあることを、沖縄のウミンチュ体験観光を事例としてとりあげ、指摘している[太田 1993:396-399]。須永は、タイの NGO と山地民による「コミュニティ・ベースド・ツーリズム⁽³⁾」とよばれる観光形態を事例に、これら2つの議論が相容れないものではないことを指摘している。彼は、前述のように力の不均衡を内包する観光システムの中で、観光対象となる人びとが「観光に巻き込まれながら抵抗したり、ときには利用したりするといった生活実践の中で、柔軟に再編成されている」[須永 2007:73]と論じている。

北部タイの山地民は、タイ国内で政治的・経済的劣位に置かれ、さまざまな問題を抱える人びとである。そして、観光においても、多数派民族であるタイ人によって観光産業が運営され、そこに観光対象である山地民の発言権は無いに等しい[cf.石井 2007; 豊田 1996; 安村 2001]。しかし、筆者が実際にトレッキングツアーに参加した際、上記のように不均衡な力関係を強調する議論に疑問を抱いた。なぜなら、「本物」を求める観光客の欲求を満たすために、観光ミドルマンが観光対象となる山地民の文化を操作し提供するという、エスニック・ツーリズムにおける特徴的な演出が「不完全」であると感じたためである。というのも、エスニック・ツーリズムにおいて隠さ

れるはずの民族の近代化が観光客の目に入り、また、観光ミドルマンによって演出されるはずの「山地民」イメージがほとんど提供されなかったからだ。この「不完全さ」はなぜ、どこから生まれたのであろうか。以上の先行研究に鑑みて、本論では以下の3つの疑問を検討課題とする。まず第1に、北部タイの山地民と観光ミドルマンとは、現在の観光産業においてどのような関係になっているのか。第2に、トレッキングツアーに従事している山地民にとって、観光産業とはどのようなものであるのか。そして第3に、今後、タイの山地民はどのように観光産業と関わっていくのかということである。

以上の疑問から本稿では、トレッキングツアーにおける演出の「不完全さ」の原因を、ツアーを取り巻く環境、山地民を取り巻く環境、そして観光ミドルマンと山地民との関係の分析において探り、その上で山地民にとっての観光産業の意義を明らかにする。そして今後の北部タイにおけるエスニック・ツーリズムのゆくえについて考察することを、研究の目的とする。

2. 研究方法

本稿では、文献や論文などの先行研究を主に使用して研究をすすめる。また、より新しい情報を得るために日本、タイ両政府によるウェブサイトやタイで活動する NGO のホームページ等のインターネットから得られる情報、そして第3章以降は筆者がタイで行ったフィールドワークを適宜利用し論じる。フィールドワークは2009年10月3日から10月12日に実施し、旅行会社へのインタビュー、観光客へのアンケート調査、トレッキングツアーでの参与観察を行った。考察ではインタビューの際にICレコーダーを用いて録音したもの、トレッキングツアーにおいては筆者が実際に体験したことや観察したこと、感じたこと、ガイドとの会話などをまとめたノートデータをデータとして用いる。

本稿の章構成は以下の通りである。第2章ではタイとタイの観光産業、ならびに山地民の概要と山地民に関する観光についてまとめる。第3章では北部タイで行われているトレッキングツアーの概要と現状を概観した後、筆者が参加したトレッキングツアーを事例として取り上げ、第4章でそれをもとに分析を進める。

また本稿では、山地民と観光客を仲介する観光産業従事者を、観光ミドルマンと表記する。観光ミドルマンとは、具体的には旅行会社や代理店、あるいはツアー中に同

行するガイドのことである。トレッキングツアーの途中で現れる、象乗りやいかだ下りなどのアトラクションに従事する人びとは、その多くがタイ族ではなく、タイ国内において社会的劣位に立つ山地民であると判断し、本稿では観光ミドルマンに含まないことにする。

また本稿では、タイ人という表記を、タイ族ではなくともタイの国籍を有する人を意味するときに使用することとする。

また、観光人類学においてしばしば問題として取り上げられる、文化の「真正性」については、本論では論じない。しかし、「真正性」に関する筆者の立場は、太田の論文にもとづく立場を支持する。太田は、観光において文化が用いられるかぎり、それは元の文脈と同じ意味を持ち得ないとしている[太田 1993:391]。つまり観光に利用するときに文化が客体化される過程で、「文化」として他者に提示できる要素を選びだす必要が発生するため、もとの文脈を離れ新しい文脈のなかでの新しい文化が生まれるのだとしている。そうして生まれた新しい文化が「真性」ではないという意見もあるが、太田は「真性であるかそうでないかを決定する判断は、現在生きている人々に委ねられている」[太田 1993:391]としている。筆者はその論を支持し、文化を語るのはその文化を所有する人々の権利であり、また、観光における文化の変容を自然なことであるととらえる。

第2章 北部タイ山地民と観光

1. タイと観光

(1) タイ王国の概要

タイ王国（以下、タイ）はインドシナ半島のほぼ中央に位置する国で、ミャンマー、ラオス、カンボジア、マレーシアに囲まれている（図1）。古くから交通のハブ地点として重要な役割を果たしており、東南アジア経済の中心でもある。また、第2次世界大戦では、東南アジアで植民地化を逃れた唯一の国でもある。

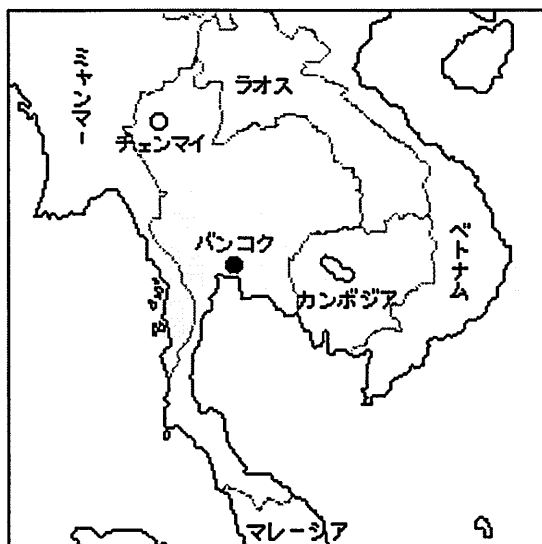


図1 タイ王国周辺地図

〔外務省ウェブサイト⁽⁵⁾〕より引用）

タイの国土面積は51万4000 km²で、日本の約1.4倍である。熱帯性気候に属し、年間を通して高温多湿で、11月～2月の乾期、3月～5月の暑気、6月～10月の雨期に分類される。特に乾期は観光のハイシーズンとされている。人口は6,625万人（2009年）で、その内訳はタイ族85%、華族10%、その他マレー系、インド系、カンボジア系を中心に様々な民族で構成されており、現在では民族間の通婚がかなり進んでいる⁽⁴⁾。このようにタイは多民族国家であるが、国民としての「タイ人」であるために重要なことは、「タイ語を話し、仏教を信仰し、国家に忠誠心を持つこと」であり、これら3

つの原則は「ラックタイ」と呼ばれる。憲法で信教の自由が明記されているものの、国民の約95%が上座部仏教を信仰している。国中いたるところに仏教寺院が建てられて、老若男女を問わず、熱心に参拝している。そして国民は国王に対する忠誠心が強く、街中には国王や王妃の大きな看板が立てられている。仏教と国王は国民の心のよりどころとして、タイにおいて絶対的な存在である。またタイの国民性をよく表すタイ語に「マイペンライ」（問題ない、大丈夫の意）がある。この言葉が表すところは、タイ人はよく言えば寛容、悪く言えばルーズなところがあるというところである[綾部 2003:152]。

(2)観光立国タイの観光政策

タイの経済に目を向けると、主要産業として観光産業が挙げられる。タイの観光産業による外貨獲得は、1982年にコメの輸出高を抜いて第1位となった。

それ以前は1930年代に5隻の客船がバンコクの港に入った程度である。第2次世界大戦後は、1950年代にサリット政権（1956～1963）の開発体制の枠組みの中で観光が発展していった。サリットは「タイ観光機構」（Tourism Organization of Thailand, TOT）を設立し、観光におけるインフラの整備と観光部門における外国からの投資を奨励した。

そして最も重要な観光の拡大期は、ベトナム戦争（1962～1975）である。当時、タイは戦争で疲弊したアメリカ軍のR&R（Rest and Recreation 休暇と娯楽）の場として使われ、多くのホテルやサービス産業施設が建設された[片山 2006:114]。しかし、1973年のパリ協定によりベトナム戦争が終了すると、アメリカ兵はタイを離れていった。するとタイには原価償却が未消化のままのサービス産業施設が大量に残された。また、戦争の終結でアメリカからタイへの援助等も減少しただけでなく、コメやゴムなどの第一次産業も低迷していた。そのため、タイ政府はそれらの施設を有効利用し、採算を取る手段を考えた結果、観光化という方向性が打ち出されたのである[石井 2007:100-104]。

表 1 タイ政府による国家的な観光開発政策（1977～2002 年）

国家政策区分	観光関連政策
第 4 次国家社会経済 開 発 計 画 （ 1977 ～ 1981）	・ 観光資源・設備・インフラの開発 ・ 既存の観光市場の維持と新規市場の開拓 ・ ローカルコミュニティへの観光開発への参加の呼びかけ
第 5 次国家社会経済 開 発 計 画 （ 1982 ～ 1986）	・ 長期滞在書状へのマーケティング戦略の集中化 ・ 公私両セクターへの観光資源開発支援 ・ 自然環境・歴史遺産の保護促進
第 6 次国家社会経済 開 発 計 画 （ 1987 ～ 1991）	・ 観光・土産物販売・タイ観光客サービス分野におけるビジネスのレベルアップ計画 ・ 観光地における施設開発・整備・観光客の滞在日数 ・ 消費額の向上を促進するマーケティング活動の支援 ・ 観光地における自然環境・文化・歴史遺産の維持
第 7 次国家社会経済 開 発 計 画 （ 1992 ～ 1996）	・ タイを東南アジアの観光拠点とするための活動推進と近隣諸侯との協調関係の促進 ・ 観光資源開発・整備に関わる事業者への支援 ・ 観光分野における人的資源の質の向上
第 8 次国家社会経済 開 発 計 画 （ 1997 ～ 2001）	・ 観光開発と文化・環境・歴史遺産保護 ・ 長期滞在者の獲得 ・ タイ観光産業のレベルアップ、インフラ・各施設の開発 ・ 近隣諸国との協調関係の構築
第 9 次国家社会経済 開 発 計 画 （ 2002 ～ 2006）	・ 域内経済協力体制の文脈における観光分野の協力促進 ・ 観光分野の国境を越えたインフラ・必要施設の開発 ・ 観光・土産物販売・対観光客サービス分野のビジネスのレベルアップと、文化・環境・社会・経済的な持続可能な観光の推進 ・ 各地域社会の観光開発への参加促進 ・ 持続可能な観光に対する系も活動の推進

（出所：[石井 2007:101]より引用、筆者改変）

タイ政府は 1970 年代後半から観光立国を目指し、1977 年から行われた第 4 次経済社会開発 5 ヶ年計画（1977~1981）の中に初めての国家観光開発計画（タイの国家開発の基本的方針となる包括的指針）が組み込まれ、国家レベルの観光開発プランを実施した。この国家観光開発計画関連の政策では、観光資源の開発と整備に重点を置き、観光マーケティングと外国人観光客を引き付ける事業の促進、そして観光地へのアクセスを容易にするインフラの開発を、今日まで継続して行っている（表 1）。

世界的なマスツーリズムの動きもあり、1980 年代の国際観光市場の拡大を狙って、大規模ホテルの建造を中心とするビーチ・リゾート開発や観光地へのアクセス強化のためのインフラ拡大、観光地における象乗りやダイビングなどの様々なアトラクションの整備が行われた[安村 2001:110-111]。1987 年には「タイ観光年」(Visit Thailand Year)、さらに翌年には「タイ手工芸品年」(Thai Handy Craft Year) というキャンペーンを実施し成功を収めた。その後も、1987 年にタイ政府観光庁 (Tourism Authority of Thailand、以下 TAT) が「Amazing Thailand」(驚きのタイ) という標語を掲げ、観光産業に力を注いでいる。現在でもこの標語は使用されており、土産物等にも表記されている。1985 年には訪タイ国際観光客数は 244 万人であったが、これらのキャンペーンを経て 1990 年には 523 万人に増えている[安村 2001:112]（表 2）。

表 2 タイの観光客到着者数と国際観光収入

	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
到着者数 (千人)	629	1180	1847	2438	5229	6951	9510	11520
収入 (百万ドル)	105	105	220	867	4326	7664	8971	11021

（[安村 2001]と TAT ウェブサイト⁽⁶⁾より筆者作成）

タイ政府の観光開発の焦点としては、①ビーチ・リゾート、②風景・自然、③文化の 3 点に分けられる。①のビーチ・リゾートに関しては、パタヤやプーケットにおいて観光客に快適なリゾートライフを提供する高級リゾートホテルの建造や、それに関連した道路・上下水道などのインフラの造成に観光開発の主眼が置かれた。②の風景・自然に関しては、象や水牛が見られる田園風景、また北部山岳地帯のジャングルや滝

などの景勝地が挙げられる。また、北部のタイ・ラオス・ミャンマーの3つの国境が川を挟んで接する三角地帯「ゴールドトライアングル」は人気のスポットである。

③の文化に関しては、タイ固有のエキゾティシズムを醸し出すだすものの代表として仏教文化が挙げられる。寺院や、アユタヤ・スコータイなどに代表されるタイ族王朝遺跡は伝統的文化遺産として保全され、バンコクからの交通アクセス手段も整備された。さらにタイ王国の文化に根付いた舞踏や手工芸品、料理も重要な観光資源となっている。そして1990年以降になると、タイ北部の山岳部におけるトレッキングツアーが注目を集めるようになった。それは、タイの山地民文化を、彼らの住む村周辺の自然とともに観光資源とする観光形態であり、それまで主流であったマスツーリズムとは異なる「新たな観光」の一形態として、現在多くの観光客に受け入れられている[安村 1995:114]。本稿ではこの「新たな観光」であるトレッキングツアーを主に扱うことにする。

2. 山地民と観光

(1) 北部タイの概要

本稿で研究対象地域とする北部タイのチェンマイ県にも年間を通して多くの観光客が訪れる。チェンマイは首都バンコクに継ぐ第二の都市で、北部タイの経済・観光の中心地でもある。2002年にチェンマイで宿泊した外国人は138万人にのぼり、観光産業は同県の主要な収入源となっている。2000年におけるチェンマイ県の総生産が、農業11.4%、鉱業0.6%、製造業18.9%、建設業4.8%、電力水道業2.1%、運輸通信業7.1%、卸売り小売業11.1%、金融・不動産業7.5%、公共事業7.6%、サービス業28.8%であり、観光とその波及産業からなるサービス業が全体の約3割を占めているということから、チェンマイが観光産業に力をいれていることがわかる[石井 2007:7]。

北部タイは、主に山岳地帯にあり、隣接するミャンマー、ラオス、ベトナム、中国西南部に連なるインドシナ中央部山岳地帯の一部である(図2)。チェンマイはバンコクから鉄道で761km(所要13時間)、高速道路で696km(所要10時間)の距離にある。ところが、チェンマイ市街地からミャンマー国境までは約130km、ラオス国境までは約100km、中国は国境を接していないものの、その国境までは約200kmに満たず、首都バンコクよりも隣接する周辺の国々のほうが近い。北部タイには13世紀末からラーナー王朝が栄え、19世紀末にバンコク王朝の下に組み込まれるまで、北部タイの

人々はバンコク王朝の主要民族であるシャム人（現在のタイ族）との接触よりも、中国南部やラオス、ミャンマーとの関係がより深かったとも伝えられている[石井 2007:6]。

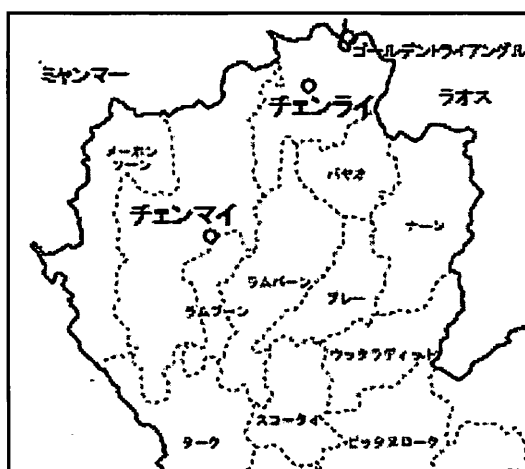


図 2 タイ北部地図

(筆者作成)

政府が 1975 年から 1985 年にかけて行った、8 つの地域に関して特定地域における総合的な観光開発計画では、チェンマイが地方観光の基幹都市として指定され、チェンマイ空港が国際空港へと格上げされた。

(2)「山地民」の誕生

タイにおける山地民とは、タイ北部から北西部にかけての山岳地帯に居住する非シャム系の少数民族のことである。それぞれに独自の文化を有しており、その中でも鮮やかで特徴のわかりやすい衣装や装飾が観光の場面でよく利用される。

タイの山地民は先住民ではなく近隣諸国からの移民である。カレン族などの一部は 18 世紀には現在のタイ領土内に住んでいたが、他の民族は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、ミャンマーやラオス、中国南西部から山の尾根をたどって移動してきた。当時は明確な国境が存在していないに等しく、彼らの移住は法の施行が及ばない険しい山間部で静かに行われ、いつの間にか国際的に認知されたタイの領土内にコミュニティを形成したというのが実情である。当時のタイには移民局のような部署が存在していなかったため、そのことが問題となることはほとんどなかった[綾部 2005:65]。し

かし、国境が明確になった現在でも、山地民の中には政治的・経済的事情によってタイに移り住む者も多い。たとえば、ミャンマーのカレン族がその独立を巡る争いをミャンマー政府と長年続けているなどの例が挙げられる。2002 年時点でタイには 92 万 3,257 人（タイ人口全体の 14.5%）の山地民が暮らし、現在もその数は増え続けているために、タイ政府は山地民全体の把握・管理ができていない状態にある。

なお本稿では、山地民と「山地民」を区別して表記する。前者はその存在そのものを、後者は外部によって与えられたイメージを内包する山地民を表すときに使用するものとする。

表 3 主要 6 部族の山地民人口（2002 年）

民族名	カレン	モン	ヤオ	アカ	ラフ	リス
人回（人）	438,121	153,955	45,571	68,653	102,876	38,299

タイ：6,625 万人 山地民：92 万 3,257 人 （出所[石井 2007:70]より筆者改変）

1950 年代以前、タイ国家と山地民は政治的な関係を持っておらず、その頃は「山地民」（チャオ・カオ）という言葉も概念も存在しなかった。タイは東南アジアで唯一植民地化されなかった国であり、そのために植民地政府による山岳地帯の人口調査が行われることも、先進国から統治のための「民族」定義が持ち込まれることもなかった。石井はこのことを、当時の山地民とタイ政府との関わりを希薄にした理由として指摘する[石井 2007:63-64]。

しかしそれでも、19 世紀終わりから 20 世紀初めにかけての時期に、タイ政府が山岳地帯への関与を試みたことはあった。近代国家を形成するために行われた、遠隔地の間接統治から中央政府の直接統治へ、という変革の一環として山岳地帯の村々に徴税・徴兵を行おうとしたためである。これに対して、1921 年にモン族とヤオ族の村で反乱が発生したことから、タイ政府はそれ以後、山地民の村落に関与しない立場をとった。そして 1950 年代まで山岳地帯に住む人々は、政策の上では存在しないものとして扱われていたのである[石井 2007:64]。

ところが 1950 年代になると、独立を保っていたタイにも冷戦の影響が及んだ。当時、東南アジアで唯一の独立国であり親米国であったタイは、アメリカから援助を受けるようになった。そこで、国境を接し、かつ共産主義国であったミャンマー、ラオス、

カンボジアから共産主義が浸透することを恐れたアメリカが、タイの国境地帯まで全ての住民管理を始めたことから山地民の存在がタイ政府にとって無視できないものとなり、タイ政府は国民統合のための政策を開始した。

1951年には政府内に「遠隔地住民のための福祉委員会」が設立され、タイ政府による山地民統治が始まった。1955年には国境警備隊が活動を開始し、1958年に麻薬吸引禁止法によって山地民の収入において重要な位置を占めていた芥子（アヘン）の栽培と吸引が禁止された。そして、1959年の「山地民」定住化プログラムによって初めて、「山地民」（チャオ・カオ）という言葉が使われるようになった。このような山地民を対象としたさまざまな国民統合政策から、「焼畑耕作を行う森林破壊者」、「芥子を栽培する問題者」、「共産主義者と関わりを持つ者」というネガティブでステレオタイプな「山地民」イメージが作り出されていった。こうした国民統合政策の中で描かれる「山地民」は、タイ人としての意識や文化が欠如した人びと、つまり「われわれタイ人とは異なる他者」という考えのもとに生まれた[須永 2007:74]。しかし、「山地民」として一括して扱われるこれらのイメージは、特にモン族の特徴を捉えたものであるといわれている。共産主義の影響下で 1967 年にモン族がタイ政府に対して起こした反乱（「赤モン戦争」）が、「共産主義と関わりを持つ者」という「山地民」イメージを植えた[古家 1993:32; 綾部 1990:312]。また、モン族は換金作物として芥子を栽培していた。古家は、タイ社会においてモン族の特徴を基本とした「山地民」概念によって一元的に扱われている山地民は、「文化的特色を共有するエスニック・カテゴリーを形成する集合体ではなく、麻薬、森林破壊、共産主義への政策の一環として、国家が定義した概念として捉えることが可能である」[古家 1993:32]と指摘する。反対に、モン族と比較されるのがカレン族である。カレン族は他の山地民よりも早くタイに移入しており、タイ国内で最大の人口を持つ山地民である。また、その当時に北部タイを支配していたラーンナータイ王朝に対して貢納を納め、その保護を受けていた。このことから、カレン族はタイ国内において山地民と平地民（タイ人）の中間に位置づけられている[古家 1993:33]。

他方、1970 年代以降、「山地民」の他者性ゆえに、タイ人によって山地民は観光資源化されていった。その際に、「エキゾチック」、「素朴」、「自然と共生した」というようなロマン化された「山地民」イメージが作り出され、欧米観光客の間で注目を受けるようになった[須永 2007:74]。現在もそのイメージは、山地民を利用した観光におい

て欠かす事のできない重要な要素であり、旅行会社の看板やパンフレット等には必ず民族衣装を着た「山地民」や、アヘンとともに写る「山地民」の写真が掲載されている。(写真1)



写真1 観光パンフレット（TATの許可済）と旅行会社の看板

（筆者撮影）

また本稿では山地民と「山地民」という表記を用いて、その意味を別とする。括弧なしの山地民はその存在そのものを、「山地民」は外部によって与えられたイメージを内包する山地民を表すときに使用するものとする。

(3)山地民の抱える問題

1)焼畑耕作の禁止と政策

山地民の多くは焼畑を主たる生業手段とする人びとである。そのため彼らは、数年～数十年毎に肥沃な土地を求めて移住する生活を送ってきた。しかし、1950年代後半からサリット政権のもとで「森林保護」の観念が山地民のもとに浸透し始めた。欧米の考え方をもとに「手つかずの自然」を神格化し、ナショナル・シンボルとしての側面を担わせるための政策であった。しかし、一方でその中には、山地民を「タイ国民」

として統合させる政策を正当化する意味合いも含んでいた。それは「森林破壊を行うものは国家の破壊者であり、よってタイ国民ではない」という構図を作り出し、山地民を「焼畑を行う森林破壊者」と名付けるような政策が行われた。そして1988年にバンコクで起こった大洪水を、山地民の焼畑農耕による山岳地帯の荒廃が原因であるとしたタイ政府は、1989年に森林伐採禁止令を出すことによって山地民の森林資源へのアクセスを制限する強化政策を採った。この森林伐採禁止令は、保護林内における居住・耕作を禁止するだけでなく、保護林から住民を強制移住させるための軍事力を使用することも許可されており、山地民の強制立ち退きも実際に行われてきた。山地民は法的に土地を持つことができないために、タイ政府の決めた土地に定住を強いられるようになった。1950年代以前は、まだ山地民の土地の利用制限がなかったために、焼畑農耕に十分な土地を確保でき、土地を肥沃に保ったままに耕作を行うことができていた。しかし、タイ政府による森林保護政策⁽⁷⁾などの土地利用の制限がかけられてからは、山地民が持つことのできる土地が減少した。さらに、人口の増加により1単位あたりの農地において、焼畑農耕に必要な休閑期を十分にとれず、土壌の肥沃性を維持できなくなるために問題となった[綾部 1990:312; 佐俣、川嶋 2004:98]。山岳地帯の限られた土地で収穫される農作物から得られる収入はわずかである。そのため、現在は山を降り、平地に出稼ぎに出かける山地民も少なくない。実際に筆者もチェンマイやチェンライの旅行会社やゲストハウスで働いている山地民を見てきた。教育を受けられずタイ語を話せない山地民はわずかな賃金で厳しい労働を強いられることもあるが、現在では教育を受ける機会も多くなったためか、筆者の出会った山地民労働者はひと目にはタイ人労働者と変わらないように感じられた。なぜなら、彼らはタイ人と同じような服を着て、タイ語を話し、他のタイ人労働者または経営者と笑い合いながら話をし、その様子からはタイ人の「山地民」に対する差別や嫌悪感のないやり取りを行っていたからである。筆者自身、彼らが山地民であるという情報を聞かなければ気付かなかった。

2) 麻薬栽培

カレン族を除く山地民の多くは、アヘンの原料となる芥子の栽培を行っていた。病気の痛みや農作業の疲れを癒すための薬草として使われるほか、彼らの民族衣装に使われる銀やビーズなどと交換する手段でもあった⁽⁸⁾。さらに、他の換金作物に比べ何

倍も高く売れるために、現金収入源として取引組織と売買をして生計を立てていた。特に、モン族が芥子の栽培を生業としていたが、共産主義に対して過敏になっていたタイ政府が、当時ラオスから入って来る身元不明のモン族に不信を抱き、低地定住化を検討した。その際に芥子の栽培を禁止する政策を施行した[綾部 1990:312]。1958年にタイ政府は麻薬吸引禁止法を制定し、芥子の栽培と使用を禁止した。このとき政府は、山地民の経済状態に甚大な被害を与えることなく、芥子を他の農産物によって置き換えることを問題として取り上げた。現在はタイ政府によるプロジェクトで、芥子に替わる換金作物（キャベツやニンニクなど）栽培が進められている。しかし、1 ライ（約 1,600 m²）ごとの収益は芥子に比べて安く、やはり他の作物の 4～5 倍の高値で売買される芥子の栽培を継続している村も存在する。

チェンマイで最も有名な観光地、ドイステープ寺院のそばにあるメオトライバルビレッジ（モン族の村）には、観光客の鑑賞用としての芥子が公然と栽培されている。また、トレッキングツアーで観光客が訪れるラフ族の村でも栽培されており、ガイドは「オピウムビレッジ」と呼び、観光客にしきりに勧めていた。このように、芥子は、アメリカを中心とした外圧の中で「麻薬撲滅」に取り組むタイ政府にとって厄介なものであると同時に、観光に関わる人々にとっては観光資源として重要なポジションも占めていることがわかる。

3)国籍の付与

タイにおける山地民は、正式な国籍を有していない。またタイの市民権は政府による公的手続きを受けられたものだけが国籍に替わり取得でき、取得者は市民権の保有者である事を証明する「国民携帯証」、もしくは「高地民居住許可証」を与えられる。しかし、山地民の 20～30%の人びとがいまだにタイ政府より証明を与えられていない。その理由は、山地民の人々が証明書を得るための交通費などの経費を出せないほどに困窮しているためである。また、増え続ける山地民の人口に政府の対応が追いつかないことや、周辺国からタイ国内にやって来る難民と、もともと住んでいた山地民との区別がつかずに証明ができないことなども理由として挙げられる。2000 年にはタイ政府により、1985 年以前にタイ領内の山地に居住していた者には市民権を与えるという通達が出された。その制度は、裏を返せば、この資格のないものは追放するということであった[速水 2005:39]。そうして、国籍に替わる証明書を受け取る事のできない人

びとは教育・就職・医療などの機会が得られず、あるいは低賃金労働者となり、またタイ国内を自由に移動することすらままならない。筆者が2008年5月～6月に北部タイを旅行中、ローカルクラスのバスに乗っていた際に何度も検問で止められたことがあった。それは山地民を決められた領域外へ移動させないように行われており、警察官がバスに乗ってきて全ての乗客の身分証を確認していた。その時、身分証を受けとることができない山地民の存在を知った。

しかしそれとは反対に、証明を得られた山地民は教育を受け、仕事に就き、平地民と変わらぬ生活をしている者がいることもまた事実である。

(4)山地民観光とは

このような歴史と問題を抱える「山地民」は外部からステレオタイプなイメージを作り上げられ、それが観光資源として使用されている。1950年代からのタイ政府による国民統合によって作られた「山地民」のネガティブなイメージ、すなわち「焼畑耕作を行う森林破壊者、芥子を栽培する問題者、共産主義者と関わりを持つ者」というイメージが、その後観光ミドルマンや観光客によってロマン化され「エキゾチック」、「素朴」、「自然と共生する」人びとというイメージに読みかえられて、山地民観光が始まった。

トレッキングツアーに参加する観光客は、先進国からの「いわゆるパッケージツアーでは満足でないことを自負しており『本物の (authentic)』旅を志向している」人びとである[豊田 1996:132]。つまり、トレッキングツアーにおける観光資源は、秘境好きの観光客が抱く、「本物の秘境」や、そこに住む人びとの「神聖な少数民族の生活」というイメージどおりのものでなければならない。さらに1990年代に入ると、「自然との共生」や、「客人に対する素朴であたたかな歓迎」などの「山地民」イメージが商品化され、強調されていった[石井 2007:113]。さらに、「太古から変わらぬ習慣が文明に汚されぬまま残る」というイメージに、アヘンの使用など「禁断の文化」イメージが付与された[石井 2007:114]。これら全ては観光ミドルマンが「本物の秘境」を欲する観光客を満足させるために作った「山地民」イメージであり、ビジネスの成功のために仕組んだものである。

またトレッキングツアーは、世界的なマスツーリズムの潮流に代わり、観光対象と観光客にとって最適な観光形態を求めるオールタナティブツーリズム(「新たな観光」)

として、1990 年以降、注目を集めているという一面もある[安村 2001:118]。「新たな観光」の方策は、観光対象の社会や文化に適応してホストとの交流を図り、自然環境の保全にも配慮する「良識ある」観光客の育成と、観光対象となる人びとの生活環境や自然環境にダメージを与える大規模な観光施設・設備や観光アトラクションの規制の 2 点に集約される[安村 2001:118]。これらの方策が打ち出された背景にはマスツーリズムによる弊害が原因として挙げられる。第 2 次世界大戦後に世界的なマスツーリズムの潮流が押し寄せる中、タイ政府も国家レベルの観光開発プランを実施し、多くの観光客誘致に成功すると共に、経済効果も増大した。しかしその弊害として、観光地における「環境の汚染と破壊」と「売春婦」の問題が発生した。また早くからビーチ・リゾートとして開発されたパタヤでは「セックス」や「麻薬」の観光地というイメージが定着し、後に観光開発された地域でも同じような課題が発生している[安村 2001:110,115]。こうした状況の中、多くの弊害をもたらした政府の観光開発プロジェクトによるマスツーリズムに代わるのが、それとは無関係に発生した北部タイのトレッキングツアーである。タイ政府の政策からはずれたところで自然発生的に出現し拡大してきたという事実は、観光客がタイ政府のマスツーリズム政策に対抗するかのような観光形態を志向したという経緯であり、そしてローカルな人びとがそのニーズに対応して新たな観光形態を模索したという経緯であると安村は述べる[安村 2001:122-123]。

それでは、ステレオタイプなイメージを作りあげられ観光資源として利用される山地民、そして「新たな観光」として注目されるトレッキングツアーについて次章で詳しく述べていく。

第3章 トレッキングツアーの実態

1. トレッキングツアーの誕生と変化

(1)トレッキングツアーの歴史

北部タイのトレッキングツアーは、1990年代から盛んになった。その頃、タイ政府の観光政策「第6次国家社会経済開発5ヵ年計画（1987年～1991年）」（表1）において、観光産業の推進が重点化されていた。1987年には「国際観光年」(Visit Thailand Year)のキャンペーンを開催するなど、外国人観光客誘致につとめている時期でもあった[石井 2007:104]。

しかし、このトレッキングツアーは政府の意思とは関係のないところで、チェンマイのローカルな人びとの判断によって自主的に始められた。それは1960年代から、ごく少数ではあるが冒険者タイプの若い観光客がこの地域を訪れ始めたことがきっかけであった[石井 2007:108]。

タイ政府が北部の観光開発を始めた当初、政府が想定していた北部タイの観光資源の対象は、滝や洞窟などの「自然の景勝地」や仏教寺院や遺跡などの「歴史的建造物」、年中行事や食事などの「伝統文化」であった。その中で山地民を対象とした観光は、タイ政府の観光開発の対象としては「その他」の欄に挙げられる項目のひとつに過ぎなかった[石井 2007:108-109]。さらに、1970年代までは山岳地帯の土地の多くを、共産主義を表す「赤い地域」として危険区域に指定し、外国人の侵入を禁止していた。しかし、タイ政府の観光関係者の当初の予想以上に、欧米からの観光客は北部山岳地帯の大自然と、そこでエキゾチックな生活を営む山地民の村を好んだのである。

石井は、トレッキングツアーの変遷をCohenの調査をもとに以下のようにまとめる[石井 2007:109-111]。

トレッキングツアーには、1970年代前半まで決まった形態がなく、観光客自身がガイドを雇ってジャングルに入っていくというものであった。この現象をうけて1970年代のはじめ、チェンマイのゲストハウスや飲食店のまわりに、ジャングルツアーへの参加を受け付ける小さな窓口ができた。その頃のツアーは、山岳地帯の自然を堪能する事を強調した「ジャングルツアー」と、山地民の村を訪れる「山地民の村ツアー」とが別々に運営されており、やがてこの2つの形態がトレッキングツアーとしてひと

つに統合されていった。このジャングルツアーは、2〜3 日程度から、観光客の希望次第でそれ以上の日数でもアレンジが可能で、ガイドが山地民の住む地域まで観光客を連れて行くものであった。当初、こうした代理店業務は地域の人びとが小規模に行っていた。しかし 1980 年代に入るとトレッキングツアーに参加する観光客が増加し、それに伴ってトレッキングツアーは急速にビジネス分野として発達していった。専属ガイドのいる旅行会社が急増し、さらにそれらの代理店が加入するトレッキングツアー関連の統括組織も創設されていった[安村 2001:118-119]。こうして、1977 年には北部タイに 10 軒しかなかった旅行代理店が、1979 年には 20 軒になり、1988 年には 54 軒、1989 年には 110 軒、1992 年には 200 軒以上と増加の一途をたどった [石井 2007:110]。トレッキングツアーに参加する観光客は、1990 年代には年間 10 万人を越えるようになった。

トレッキングツアーは、1980 年代までは北部に住むタイ人が率先して行ってきたローカルで小規模なツアーであった。しかし、1992 年にタイ国家により観光に関する法律が整備され、ガイドや代理店に対して資格制度を設けるなど、しだいに国家規模の政策となっていた。そして 2000 年現在では、チェンマイ市内だけで 256 軒の旅行代理店がタイ政府観光庁に登録されている[石井 2005:15]。1992 年以降、タイ政府観光庁は旅行会社および代理店に対し、開業時に「旅行代理店および旅行案内人管理局」への開業許可の申請と保証金を支払う事を義務づけている。旅行代理店は、旅行業許可申請のために 10 ページ以上の開業許可願いを作成し、連帯保証人にサインを得た後に、経営規模によって 1 万バーツから 50 万バーツ（1 バーツ＝約 3 円）までの保証金を支払わなければならない[石井 2005:16]。この申請によってライセンス番号を得ると、旅行代理店の多くは看板にライセンス番号を明記したり、店内に証書を飾ったりしてツアーの安全性を知らせ、観光客からの信頼を得ることで集客に励んでいる。また申請を行うと、タイ政府観光庁が発行するパンフレットの登録代理店一覧表に名称が明記され、法的に保障された旅行代理店としての宣伝効果を得られる[石井 2007:135-136]。このように、以前は政府観光庁の管轄外で発展してきたトレッキングツアーも、1990 年代以降は政府によって管理されるようになった。さらに、速水が 2003 年に調査で訪れたドイインタノン国立公園にある村では、国立公園局によってエコツーリズムの村に指定されたため、電気を引かずに「鄙びた山の村」の景観を保っているという例を挙げている[速水 2005:40]。

現在行われているトレッキングツアーには、標準的な形態がある。観光客はたいいて、タイ北部の中心都市チェンマイ、そしてタイ最北端の県である北部第2の都市チェンライ⁽⁹⁾にある旅行代理店で直接申し込みを行う。北部最大の都市チェンマイでは、観光客の集まる地帯の通り沿いに多くの旅行代理店が立ち並び、いつでも、どこでも、すぐに予約ができる。トレッキングツアーはほぼ毎日開催されており、毎朝多くの観光客がピックアップトラックに乗せられて出発していく。5~10名程度の観光客で1つのグループが形成され、そこに1人ないし2人のガイドが同伴する。エレファントライド（象乗り）、バンブーラフティング（竹のいかだの川下り）、滝遊びなどの内容が組み合わされ、旅行会社により設定されている特定のルートを巡る。このルートは、タイ政府観光庁（TAT）が認定した旅行代理店が開拓し、観光警察（ツーリストポリス）が許可をあたえたものである[石井 2007:111]。日帰りのツアーから10日間に及ぶツアーまでであるが、その内容に大きな差はない。基本のアクティビティは変わらず、歩く距離や時間が異なるだけであり、2泊3日のツアーに申し込むのが一般的である。トレッキングツアーの最終目的は、タイ山地民の村落を訪れ、それらの「本物の」生活や文化を体験し交流する事にあると、安村をはじめこれまでの研究で様々な研究者によって語られてきた[安村 2001:119]。

(2)ガイドの役割

トレッキングツアーにおける山地民村落への観光は、基本的にガイドを介して行われる。ガイドの役割は、訪れた村の中を案内し、観光客の食事、寝床の準備、観光客の山地民社会に関する質問に答えることである。山地民はそれぞれの種類の民族ごとに異なる独自の言語を持っており、観光客が英語の話せない山地民と直接コミュニケーションをとることは難しいため、英語を話せるガイドが仲介する[豊田 1996:133]。そして、現在ではタイ語を話せる山地民が増えているため、ガイドと山地民はタイ語でコミュニケーションをとることが可能になっているという指摘もある。石井のフィールドワークの中では、「ガイドは山地民の言葉を話す事ができる」と旅行会社が主張する場面や、山地民が英語を理解することができないために、ガイドが勝手な山地民イメージを観光客に話している、ということが問題として挙げられていた[石井 2007:143-150]。

特に観光において強調される「山地民」のイメージは、アヘンの使用や人里はなれ

た森の中で、電気もない伝統的な自給自足の生活をしているというものである。そして、ガイドが観光客に対して提示するイメージというのは、観光客の抱くものに近くなければならない。このトレッキングツアーでは、実際に、ガイドが「演出者」とツアーを引率する「ツアーリーダー」を含めた全ての役割を担っている[安村 2001:122]。

(3)トレッキングツアーに参加する観光客

トレッキングツアーに参加する観光客の傾向について、豊田は、高学歴で未婚の若者が多いと指摘している[豊田 1996:131-132]。しかし、実態調査が行われる以前から根拠のないままに、このような考えが広まっていた。そこで、1997年にタイの研究者、ソークソンプアンがツアーに参加する外国人観光客を対象に実態調査を行った。その結果が石井の論文中にまとめられている。ソークソンプアンのこの調査に関する論文はタイ語での表記のため、本節では石井の論文を用いて以下にまとめることとする[石井 2007:112]。

ソークソンプアンは1997年3月にチェンマイ県内でトレッキングツアーに参加した全ての外国人観光客 350 人に調査を行った。そのうちの 70%が欧米から来た 29 歳以下の若者であった。トレッキングツアーに参加する観光客に共通の特徴としては、未婚で大学卒業以上の高学歴者の割合が高いということであった。この調査により、豊田を含む多くの研究者の指摘が証明できる[石井 2007:112-113]。また、安村によると、トレッキングツアーに参加する観光客の平均年齢は 28 歳であり、これはトレッキング行程が過酷であるためであるという。また、その多くが儉約型長期滞在旅行者であった[安村 2001:121]。そしてこれらの人びとは、いわゆるパッケージツアーでは満足できない、「本物の(authentic)」旅を志向している人びとである[豊田 1996:132]。

2. トレッキングツアーで語られる山地民

筆者は2009年10月9日から10日まで、1泊2日のトレッキングツアーに参加した。チェンマイでツーリストが多く集まる地域にある、ごく一般的な旅行会社で最も人気のあるツアーを予約した。筆者が事前にいくつかの旅行会社でインタビューをした際の最も人気のあったトレッキングツアーは、①山を歩く、②象に乗る（エレファントライド）、③いかだでの川下り（バンブーラフティング）、④急流下り（ホワイトウォーターラフティング）、そして⑤山地民の村で休憩と宿泊で構成されるものであった。

筆者がここで予約をした内容も、それらとほぼ変わらぬものである（表 4）。

表 4 トレッキングツアー日程表

10 月 9 日	ピックアップトラックのお迎え オーキッドファーム観光 10 分 昼食 トレッキング開始 ↓ 1 時間 ラフ族の村で休憩 30 分 ↓ 2 時間 パロン族の村で宿泊
10 月 10 日	朝食 ピックアップトラック エレファントライド(象乗り)20 分 バンブーラフティング(いかだ下り)30 分 首長族の村見学 昼食 滝遊び2カ所 ホワイトウォーターラフティング(急流下り)30 分 ピックアップトラックでチェンマイへ

（筆者の経験に基づく）

このツアーの参加者はカナダ人の夫婦、イスラエル人の女性 2 人、そして筆者の 5 人であり、ガイドが 1 人ついた。筆者を含め、観光客はすべて 20 代で、トレッキングツアーに参加するのは初めてであった。ガイドは 40 歳代くらいで、自らをラフ族であると言っていた。チェンマイを出発し、ツアーに組み込まれているオーキッドファーム(蘭園⁽¹⁰⁾)や市場に寄りつつ、通算 1 時間ほど走ってトレッキングの開始地点に到着した。

トレッキングが始まると、たびたびガイドは道ばたに生えている植物についての説

明をしていた。たとえば、ある植物の葉をちぎって「これは薬草だ。山を歩いているときに怪我をしたら巻いておく」や、山肌で栽培されている陸稲をさして「あれはラフライスと呼ばれている。農薬を使っていないから体にいいし、ビタミンもたくさん含んでいて健康的だ」などである。さらに「これはオピウム（アヘン）だよ。吸いたいかい。ここでは大丈夫だよ」と言って、しきりにアヘンの存在を強調し、勧めてきた。芥子の栽培も使用も、タイ国内ではもちろん違法である。一緒に参加していたうちの一人は嬉しそうなそぶりを（多分にその場の雰囲気に合わせて）していたが、他の3人はどう反応しているのかわからないというような、困った表情をしていた。以前はアヘンを求めてトレッキングツアーに参加する人々が多かったようだが、現在ではそれは一般的ではない[安村 2001:121]。彼のアヘンについての説明は、アヘンを求めてジャングルに入っていく観光客像が当初のトレッキングツアーそのままに残っていることをうかがわせる。その後も、ガイドは道沿いの畑の作物の説明をし、勝手に作物を獲るなど、まるで自分の庭のように振舞っていた。彼は山に慣れているようであり、またこのラフ族の村と同じラフ族出身であるということから、このような行動をとっていたのだろう。

休憩ではラフ族の村を訪れた。舗装こそされていないが、車も通れるような通り沿いにある集落である。大きなパラボラアンテナやバイクがどの家にもあり、電線も張ってある。そして、村の中に民族衣装を身に付けている人は全く見あたらない。筆者ら観光客が「民族の伝統的な暮らし」だと想像できるものは高床式の竹と木で作られた家と野放しになっているニワトリや小屋で育てられているブタなどの動物だけである。

村には観光客用の休憩所としての施設が設けられていた。それは村内の他の家と同様に竹と木で作られており、部屋の中には囲炉裏があった。それ以外に家財道具は無く、人が住んでいる様子はなかった。筆者らはそのテラス部分でガイドが淹れてくれた「ラフ族の伝統的なお茶」を飲んだ。筆者らが普段使うような保温ポットの中から竹の節を利用して作られた小さなコップに注がれたものは、ドクダミ茶のような味のお茶であった。それ以外にガイドからの説明は無く、筆者らがお茶を飲んでいる間、ガイドは村の人びとと話をしているようであった。その間、観光客らはお茶を飲みながらぼんやりしているのみで、特に村の風景や人びとに興味を持っている様子は見られなかった。

30 分ほど休憩した後、村を出発し、ガイドはその後もジャングルに生えている植物の説明をして、それをラフ族がどう使っているのかということと話しながら進んでいった。あるところではけもの道を歩き、そして小川を越え、バイクも通れるようなでこぼこの道を歩き、宿泊地であるパロン族⁽¹¹⁾という山地民の村⁽¹²⁾に着いた。この村に、住んでいるのは全部で7人という非常に小さい村であった。村人が住む家は2棟、お菓子と水とサンダルのみを売っている小さな商店と、ガイドがツアー客のために料理を作るためのキッチンが1棟、そしてツアー客の宿泊施設が2棟あり、最大20人ほどが泊まれるようになっている。トイレはあるがシャワーはなく、側を流れる川を利用して体を洗ったり洗濯をしたりしている。村に電気はなく、アルコールランプで灯りをとっている。ツアー客用の宿泊棟には簡単な寝具と蚊帳が準備されていた。

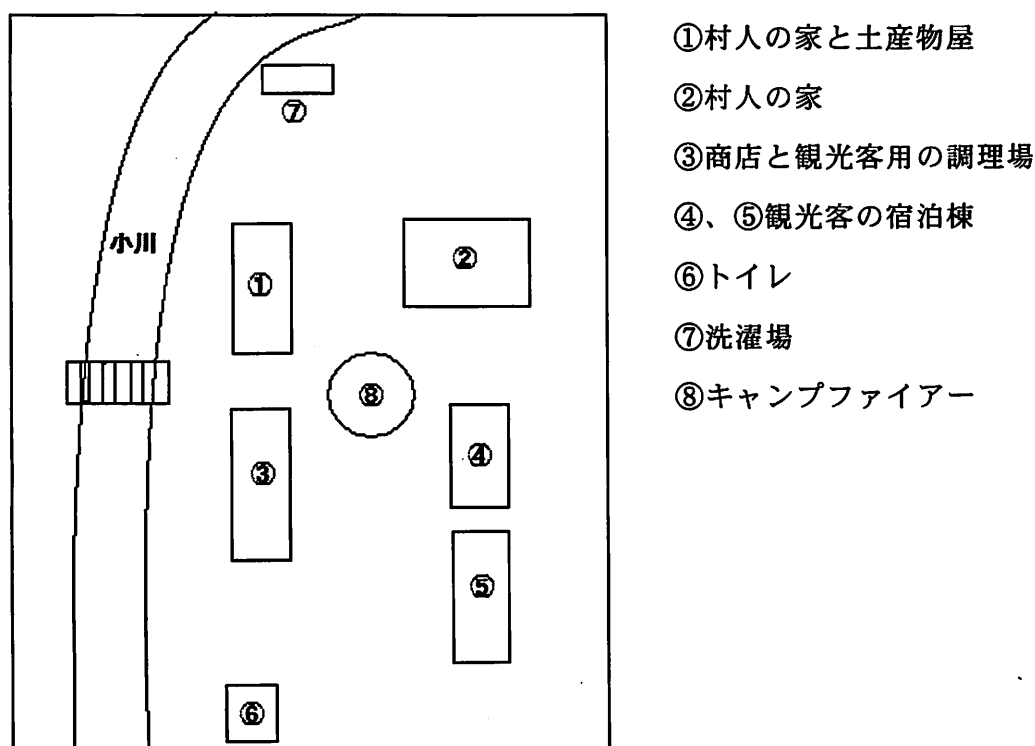


図3 宿泊したパロン族の村（筆者作成）



写真1 パロン族の村の様子（筆者撮影）

村の入り口にある住居には小さな土産物屋が設置されており、首長族を描いた葉やシルバーのブレスレット、村人が織ったというストールなど、どこの村にでもある土産物が売られていた。筆者ら観光客が村にたどり着いたとき、村のおばあさんがパロン族の伝統的な衣装に着がえ始め、商品を売ろうと控えめに商売を始めた。しかしそれも最初の10分ほどで、その後、商品については全く触れずに交流をした。商品は全て砂埃をかぶっており、ほとんど売れる見込みはなさそうだった。

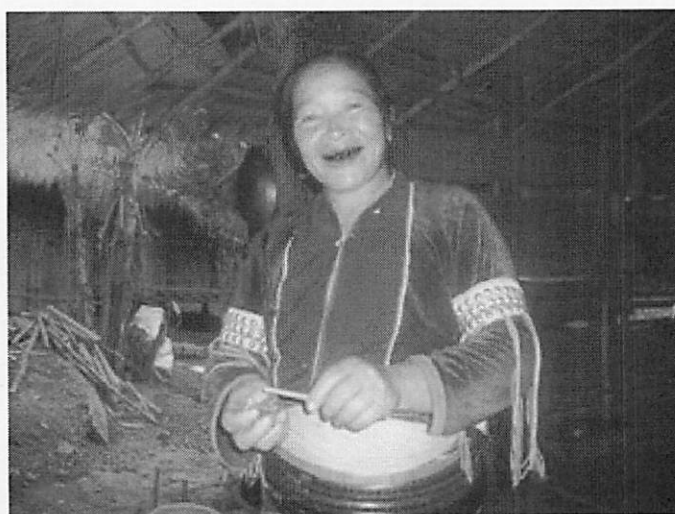


写真2 パロン族のおばあさん（パロン族の村にて筆者撮影）

観光地などで民族衣装を着た山地民の写真を撮ると「『20 パーツ』と言ってチップを要求される」[藤巻 2009:234]が、このおばあさんはそのようなそぶりを全く見せなかった。

筆者らは村に到着してからガイドが夕食を作り終えるまでの時間を、小川での水浴びや村人との交流をしながら過ごした。交流と言っても村人の方から筆者ら観光客に近づいて来ることはなく、村人の普段の生活シーンの物珍しさに観光客が近づいて行き、写真を撮るというものであった。村人らは、観光客がいるからと、何か我々に対して特別なことをすることもなく、小川で洗濯をしたり、鶏小屋に鶏を戻したり、ベンチに座ってのんびりと話したりしながら過ごしていた。村人らはほとんど英語を話せないがタイ語は話せるようで、ガイドとはいくらか笑いながら話をしていて。しかし、村に1人だけいる5歳の子どもは観光客慣れしているようで、「Yes」「No」「Let's go」などの簡単な英語を話し、筆者をはじめ他の観光客にも話しかけ、一緒に遊んでいた。

ガイドが食事を作り終えてからは、ガイドと我々観光客で話をしたり、言葉あそびゲームをしたりした。その間、村の人びととのコミュニケーションは全くなかった。筆者が、「これは本物 (real) の村なのか」と尋ねると、ガイドは「いや、ここは観光客のために作った村だ。だから、電気も無いだろ。観光客は、電気がない村に行きたいと言うからね。すぐ近くに村があって、ここで暮らす人以外はその村で暮らしている。ここにいる村人は、自ら選択して、ここに住んでいるんだ」と答えた。ガイドは観光による演出を全く隠さずに我々観光客に話した。先行研究においては、ガイドが山地民の生活や文化を伝える役割を担っているが、その多くが「山地民」イメージに合わせた説明であるということがしばしば取り上げられている [e.g. 豊田 1996:133; 須永 2005:74; 石井 2007:143]。たとえば石井の事例では、「秘境」を求めて過去に9回に及んでトレッキングツアーに参加した欧米人観光客と、石井、日本人観光客、そしてガイドが登場する。ガイドは欧米人観光客が求める「秘境感」を演出するために他のツアー客からわざと距離を置くよう石井に頼んだり、宿泊先の村で山地民の伝統的なスタイル（ただし実際にはタイのスタイルである）を観光客が思い描く「山地民」イメージに合うように説明したりする姿が描かれている[石井 2007:143-148]。これらの現象が生まれた背景には、多くの場合ガイドが観光客に説明する際に英語を用いるため、山地民の人びとがそれを理解できないということが大きな理由として存在する。

この村においても、ガイドが演出を含めた語りで山地民について話したとしても、英語がわからない村人には伝わらなかったであろう。しかし、このガイドはこの村の中で演出をするそぶりを全く見せなかった。この村での演出は、電気がないこととパロン族のおばあさんが民族衣装を着たことのみである。電気がないこの小さな村は旅行会社が作ったということに間違いはないだろう。後に判明するが、幹線道路に近いこの村に電気がないということはある得ず、先のガイドの語りからも明らかである。おばあさんが民族衣装を着ることは、観光ミドルマンからの強制的な演出ではないと筆者は考える。観光産業に関わりを持つ山地民が民族衣装を着るのは、民族衣装を着ていないときよりも商品が売れる確率が高いからである。民族衣装を着るも着ないも、山地民自身の選択なのである。このような経験から、筆者はこの村において、石井が述べているような観光ミドルマン、特にガイドの説明から感じられる「強力な」演出を感じることはなかった。

翌朝、再びガイドの作った簡単な食事を終え、村を出発した。10分も歩くと、すぐに大きな舗装道路に出て、そこに待ち受けていたトラックに乗り込んだ。我々の宿泊した村の50歳代くらいのおばあさんと20歳代くらいの娘も一緒についてきてトラックに乗りこんだ。娘は巻きスカートにTシャツの普段着であったが、おばあさんは相変わらず民族衣装を着ていた。彼女らは途中の観光スポットらしき場所で降りていった。それは彼女らにとってもトラックの運転手にとっても普段どおりの行程であるように、スムーズであった。

トラックに乗ってさらに10分ほどいくと、道路沿いにあるエレファントキャンプに到着した。そこは旅行会社が独自に経営しているもので、会社名の入った看板が立てられ、会社名の入ったミニバンが何台も入ってきていた。筆者らのグループが象に乗る時間は決められており、別のグループが後につかえているため、ガイドは筆者らをせかしながら象のもとへと向かった。

決められたように象に乗り、20分ほど付近を一周した後、またせかされるようにバンブーラフティング（竹のいかだ下り）へと向かった。いかだ乗り場もエレファントキャンプと同じ場所に設置してあった。後にわかったことであるが、バンブーラフティングの船員は、近くにあるパドウン族（首長族）の村の男性⁽¹³⁾であった。30分ほど川を下り、降り場で再び待ち受けていたトラックに乗り、「パドウン族（首長族⁽¹⁴⁾）の村」へと向かった。ガイドの説明を聞きながら村を一周し、再びエレファントキャ

ンプへ向かい、隣接するドライブインのような休憩所で、グリーンカレーやパッタイ⁽¹⁵⁾、野菜のスープなど、タイにおける一般的な料理の昼食（バイキング形式）をとった。この旅行会社でトレッキングツアーに参加する人が全てここで昼食をとるようだ。昼食の後は、トラックに乗り、道路沿いにある2つの滝で遊んだ後、ホワイトウォーターラフティング（急流下り）でトレッキングツアーは締めくくられた。

トレッキングツアー2 日目は、全てがシステム化されていることが観光客にもわかるほどであった。筆者らはガイドに指定された順番どおりにトラックに乗せられて移動し、行動した。全てのアクティビティは幹線道路沿いのしっかりと整備された施設で行われ、そこには筆者らのグループだけでなくトレッキングツアーに参加している他の観光客グループも一緒になることが多かった。つまり、秘境の「冒険」はおろか、大自然もエスニックな山地民イメージも何も感じられないプログラムであった。それでも、筆者らと一緒に行動した観光客の4人は写真を撮ったりしながら、それら一連のアクティビティをととても楽しんでいるようであった。

筆者はこのトレッキングツアーの経験を通して、観光ミドルマンが「山地民」イメージを強調・商品化して売買（演出）するといった従来の「山地民観光」から変化が起こっていると感じた。第4章では、トレッキングツアーの変化を引き起こしたさまざまな要因についての分析を進め、山地民にとってのトレッキングツアーの意義を明らかにしていく。

第4章 トレッキングツアーと山地民との関係性

1. トレッキングツアーにおける環境の変化

(1)トレッキングツアーのシステム化

第3章で記述したとおり、現在のタイのトレッキングツアーには標準的な形態があり、またそのルートは政府と観光警察に許可を得たものでなければならない。トレッキングツアーで訪れるタイ北部の山岳地帯は国立公園であり、タイ政府の管理下（森林局）におかれている。国立公園内に住むことは禁止されているが、現在住んでいる山地民は黙認された状態である。また、前述のとおり1992年の法制定以降、ローカルに発展してきた北部タイの観光産業も、旅行会社を運営するためのライセンスが必要であるためにタイ政府が決定した制度に従わなければならなくなったためである。ほとんどのツアーにおいて、基本的なルートは観光警察が許可したいくつかのルートを共有しているに過ぎない[石井 2007:111]。日程が長いほど山岳地帯の奥に行けるのではなく、実際は決められた範囲の地域(ルート)を歩くか、ピックアップトラックで通り過ぎるかの違いであるとも言われている。それは、どのプランのツアーに参加しても同じような場所を歩いているだけだということである。さらに、トレッキングツアーの内容はどの旅行会社に尋ねても似たようなものであった。筆者はチェンマイに滞在中、15ほどの旅行代理店に「一番人気のトレッキングツアーは何か」という質問を行った。それらの店で得られた回答によると、やはり筆者が参加したものと同じく、森を歩くこと、エレファントライド、バンブーラフティング、ホワイトウォーターラフティングが全てのツアーに共通するアクティビティであった。そしてそれぞれの旅行代理店で観光客が選択すべき問題は、チェンマイよりも北の地域に行くか南の地域に行くか、またラフ族の村に行くかカレン族の村に行くか、滝に行くか行かないか、などというもののみであった。選択の際に最も重要であるのはパドゥン族（首長族）の村に行くか行かないかという問題である。なぜなら彼らの村は他の山地民の村と違い、入村料の300～500バーツが料金に上乗せされるからだ。旅行代理店でも、必ず「首長族の村に行きたいか」と尋ねられた。

前述のとおり、1980年代以前のトレッキングツアーは観光客自らがガイドを雇って、観光客自らツアーをアレンジし、ジャングルに分け入る「冒険」であった。決められ

たルートもなく、ガイドが知っている山地民の使う道を辿っていき、まだ見たこともない「未開の」山地民との出会いがあった。しかし、それから 20 年が経過した 1990 年代にはそのようなトレッキングツアーがシステム化された。現在チェンマイで行われている人気のトレッキングツアーに個人的なアレンジを加えることはできない⁽¹⁵⁾。観光客は決められたルートを歩き、決められたアクティビティをこなしていくものである。また毎日開催されているため、ツアーの予約はいくらでもある旅行会社からすぐにでもできるようになった。1 人での予約の際も必ずグループを組んで行けるために参加料金も安く、気軽に参加できるようになった。またガイドブックにも取り上げられ、人気のアクティビティであると参加する観光客はさらに増える。これはマスツーリズムの流れに似ている。さらにタイ政府による国家的な観光客誘致政策もあって、観光客は年を追うごとに増加している、トレッキングツアーに関しては、代理店における集客活動が開始されてから、特別の努力をしなくとも観光客がやってくる状況になっている。しかも欧米など遠い国から来た観光客がトレッキングツアーに参加する機会は、そう多くはない。つまり、たとえガイドが少々手を抜いて「本物の山地民」の演出が不完全になったとしても、1 回きりの観光客を相手にする観光産業では、すぐに次の観光客を手に入れることができるのである。

以上のようにトレッキングツアーは 20 年前の姿から変化し、そのシステム化に伴ってガイドも、参加する観光客も変化してきたのである。

(2)観光客が抱く山地民イメージ

筆者は 2009 年 10 月 3 日と 4 日に、チェンマイ市街地で観光客に対してアンケートを行った。その方法は、有名な寺院の敷地内や観光客の多く集まる地域で道行く観光客に声をかけ、アンケートの趣旨を説明し、承諾を得た後に記入してもらうというものである。アンケートの内容は、以下の通りである。

①あなたはタイの山地民についてどのようなイメージを持っていますか。

②今までトレッキングツアーに参加した事がありますか。

それはどのような内容のツアーですか。

参加する前と後で、山地民に対するイメージは変化しましたか。

山地民の生活スタイルについてどう思いますか。

③参加しなかった人は、なぜ参加しなかったのですか。

また、トレッキングツアーに対するイメージを教えてください。

④山地民と旅行会社に対する要望を記入してください。

このアンケートでは 20 人の回答を得られた。うち、トレッキングツアーに参加したことのある人は 8 人であった。

基本的に、筆者が回答を求めた観光客は若い欧米人である。なぜなら、トレッキングツアーが欧米人観光客の行動をもとにして始まったことや、現在トレッキングツアーに参加する観光客は、オーストラリア、アメリカ、ドイツ、フランスなど欧米人が多いという先行研究があるからである[豊田 1996:132]。また、実際に筆者がトレッキングツアーに参加した際も、またチェンマイでピックアップトラックに乗っているトレッキングツアー参加者を見ても、欧米人ばかりであった。

先行研究では、トレッキングツアーの最終的な目的は山地民の「本物の」生活に触れ、交流することであると言われている[安村 2001:119]。観光客のアンケート回答の中にも“real hill tribe people”や“traditional”、“authentic”という単語が多く見られたことから、現在でも重要視されていることがわかる。また回答者の 60%ほどが「山地民の伝統的な生活を守ってほしい」、「旅行会社は山地民の伝統を保護すべきだ」、「我々観光客は山地民の伝統的な文化を傷つけている」という回答をしていた。つまり、観光客は山地民の「本物の」生活を望んでいるということが言える。しかし裏を返せば、観光で訪れる山地民の村が「本物ではない」ということも感じているのである。

また、②の質問では、「トレッキングツアーに参加するまで、山地民のことは知らなかった」、「トレッキングツアーに対するイメージは、タイのジャングルを歩くことだった」という内容の回答がほとんどであった。つまり、トレッキングツアーに参加する観光客は必ずしも最初から山地民とのふれあいを求めていたわけではないのである。

彼らの目的はタイのジャングルを歩くことにあり、山地民とのふれあいは最終目的ではなく、他のアクティビティ(エレファントライド、ラフティングなど)と同等の位置に置かれているのである。また、旅行代理店に「一番人気のトレッキングツアーの内容は何か」というインタビューを行うまで、筆者は旅行代理店のスタッフが「山地民」イメージによる山地民の姿について強調しながら、トレッキングツアーを勧めてくると予想していた。なぜなら、旅行代理店の看板には、必ず山地民が民族衣装を着た写真が載せられていたからである。しかし実際には筆者が山地民について質問するまで窓口のスタッフは山地民には一切触れず、タイの大自然やラフティングなどその他のアクティビティについての説明をしていたのである。観光産業に精通した旅行代理店は、観光客にトレッキングツアーへの興味を持たせられるよう、より効果的な勧め方をするはずである。つまり、旅行代理店が山地民についてほとんど説明をしたり強調したりしないということは、トレッキングツアーに参加する観光客にとって山地民の存在がそれほど重要な要因ではないということを意味する。

そしてさらに筆者が指摘したいのは、前節でも述べたとおり、この20年でトレッキングツアーがシステム化し、北部タイの主要なアクティビティとして有名になったことで、ある程度の体力があれば誰でも参加できるようになり、観光客は深く考えずに参加するようになったのではないかとということである。つまり、トレッキングツアーが始まった当初の「冒険者」タイプの観光客だけではなく、タイの秘境感を味わい、いまだ見ぬ山地民に会いに行きたいなどと強く考えずとも、他の観光客とともにツアーの流れに乗ってたどり着けるようになったのである。

また前述したように、観光客は観光で訪れる村の山地民がすでに「本物」ではないことを知っている。山地民が民族衣装を着ていると、観光客は彼らの日常生活にはない珍しい対象に出会えたことに喜び、山地民と一緒に写真を撮って満足するが、それも演出であることを知っている。要するに、観光客にとってトレッキングツアーは、秘境の雰囲気を感じる旅なのである。

しかしそれでも「本物の山地民」はどこかに存在し、それをそのままの状態を守ってほしい、ということが観光客の願いでもある。筆者が行ったアンケートの「④山地民と旅行会社に対する要望を記入してください」という項目では、ある観光客が「(観光化されていない)本物の村に行きたい」と書き、しかしその後に「でもそういった本物の村もすぐに観光化する道を見つけてしまうのだろうね」というあきらめの

心理が描かれていた。観光客は「本物」を求め、目の前にある本物を受け入れることができずにいる。そしてどこかに「本物」があるはずだと願いながらも、すでに存在しないこともわかっているのであろう。橋本も「観光」を「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして売買すること[橋本 2003:60]」であると述べるように、観光客自身もトレッキングツアーが「本物」の冒険ではなく一時的な楽しみである「観光」であることを、認めているのかもしれない。

(3)トレッキングツアーに参加しない観光客

筆者が行ったアンケートにおいて、トレッキングツアーに参加していない観光客の性質は、大きく2種類に分類できることがわかった。それは、トレッキングツアーやその内容(ジャングルや山地民)に全く興味がない観光客、トレッキングツアーのために訪れる観光客に対して良い印象を持っておらず、そのようなツアーへの参加をためらう観光客である。

後者のタイプの観光客は、観光客が大量にトレッキングツアーに参加し山地民の村を訪問することで山地民の伝統的な文化や価値が傷つけられてしまうと考えている。彼らは「なぜツアーで山地民の村を訪問するのかわからない」という趣旨の話をしていた。また「民族衣装を脱ぎ、欧米文化のものであるTシャツを着るなんて間違っている」、「山地民の伝統文化が我々の文化に侵されて消えていくことはいけなことだ」、「自分たち欧米人のせいだ」などと言い、伝統文化が失われ近代化していく山地民の生活を憂いていた。ところが彼らにとって、トレッキングツアーではなくバイクやピックアップトラックなどを借りて個人で村を訪れることには問題がないらしい。実際に彼らの中にも自身でバイクを借り、地図を頼りに個人的に山地民の村を訪れたことがあるという人物もいた。このような観光客はトレッキングツアーで訪れる村がすでに観光化・近代化された「本物ではない」村であることを知っている。そして、トレッキングツアーでは訪れない、観光客のいない村は「本物」であり、より「本物」を求める彼らのような観光客は、トレッキングツアーではなく旅行会社の助けも借りずに個人で訪問するのである。また、さらなる「本物」を求める観光客はタイを離れ、ラオス、中国、ベトナムなどへ行くようになってきているとも言われている[片山 2006:129]。このような「本物の山地民」を求める観光客が増加すると、現行のトレッキングツアーには魅力を感じず観光客離れが進むであろうが、現在のところそのよう

な影響はトレッキングツアーには表れていない。

2. 山地民と観光ミドルマンの関係

(1) 観光客の変化による山地民と観光ミドルマンの変化

前節で述べたとおり、トレッキングツアーがシステム化したことで、観光客の質も「本物の秘境」を求める人びとから「秘境の雰囲気を感じることで満足する人びとへと変化した。このような変化により、山地民と観光ミドルマンの関係も変化したのではないだろうか。

「秘境の雰囲気を求める」タイプの観光客が増加したことで、トレッキングツアーは「本物」でなくとも成立するようになった。つまり、山地民が「山地民」でなくてもよかったのである。もし、現在の観光客が1980年代以前のような「本物の秘境」を求める「冒険者」ばかりであれば、観光ミドルマンは山地民に対して「本物の山地民」であることを強いるだろう。山地民自身もそれによって収入を得られるのならば、「本物の山地民」を演出するという選択をするであろう。しかし、筆者が参加したトレッキングツアーで山地民が「山地民」らしく振る舞ったのは、おばあさんが民族衣装を着たということのみである。とは言っても、筆者らが到着したときにはすでに民族衣装の基本的な衣装はすでに身に付けており、到着した際にはパロン族の特徴である腹に巻く輪状の付属品を身に付けるという簡単な行為であった。その行為が演出であるのか、身だしなみであるのかは、はっきりとはわからない。民族衣装を着ているのが若者であればほぼ間違いなく演出であると言える。しかし、多くの山地民が近代化しているとは言え、このおばあさんほどの年齢（推定50歳）であればまだ日常的に民族衣装を着ていることも十分に考えられるのである。また、宿泊先の村では川で洗濯をしたり、鶏を放し飼いにしていたりしていたが、それは演出ではなく彼らの日常生活の一部である。つまり、この村の山地民は、旅行会社が用意した「観光用の電気のない村」を生活の場に、現在を生きているだけであった。彼らは観光客の宿泊費用を受け取りながら普段どおりの生活をしているのである。先行研究でしばしば問題となる、観光ミドルマンと山地民との不均衡な力関係は、山地民がタイ人経営の旅行会社の行うトレッキングツアーのアクティビティに組み込まれ、宿泊や休憩、さらに集客のための宣伝に利用をされる限り存在する。しかし、「山地民」イメージに束縛されない山地民と観光ミドルマンの関係は、石井や豊田が言うようなイメージどおりであ

ることを無意識に強要されている山地民と観光ミドルマンという2者の力関係から、その力の幅が狭くなってきているのではないだろうか[cf. 石井 2001; 豊田 1996]。

(2) タイ語と教育の普及

このように「本物の山地民」を演出せず、近代化した状態を隠さない背景には、この30年の間に起こった山地民を取り巻く環境の変化がある。筆者は北部タイにおけるフィールドワークを通して、タイ語を話す山地民に数多く出会った。トレッキングツアー中にガイドから、山地民とはタイ語で会話することを聞き、また平地で働く山地民も経営者とタイ語で話をしていた。

筆者は2009年10月7日に、チェンライ県で旅行会社を営んでいる Miyuki Jaksuwan さんにインタビューを行った。Jaksuwan さんは日本人であるが、7年前にこの旅行会社のタイ人経営者と結婚し、現在は会社のマネージャーとして働いている。タイ語と英語でのコミュニケーションが可能で、山地民の村をしばしば訪問している。

このインタビューで筆者が、「タイ人は山地民のことをどう思っているのか」という質問をした際、Jaksuwan さんは、「バカだと思っている」と答えた。というのも、「基礎的な教育を受けている人とそうでない人とではまともに話ができないから」であり、「それは日本でも同じこと」であると言う。裏を返せば、基礎的な教育を受けることができ、まともにビジネスの話ができれば、タイ人も山地民をバカにしたりはしないということである。いまだに山地民に対する差別や蔑視はあるものの[cf. 綾部 2003:149]、山地民がタイ人と遜色なく話をする姿を見られるようになった背景には、山地民が教育を受けられるようになり、またタイ語を話せるようになったことが大きな要因である。さらに Jaksuwan さんは、「同じ言葉を話すということが発展に必要なことである」と話していた。この発展というのはタイ国家のみならず、山地民の発展にも言えることである。以上のように Jaksuwan さんは山地民の教育とタイ語を話すことの重要性を説いていた。

山地民に対する教育政策は1955年にタイ政府による国民統合の一環で始まった。共産主義勢力の浸透を阻止し、タイ国家への帰属意識を持たせるためには教育が有効な手段になるとして、国境警備警察が山地民への教育普及を計画した。1956年以降、山地民村落への学校建設を進め、1959年に設立された「山地民福祉委員会」では山地民政策の目的として、国境地帯の安全維持、山地民の芥子栽培の禁止、焼畑農耕の禁止

と定住化の促進を掲げた。そして、山地民がタイ語を理解できないことを政策遂行の障害と考え、国民統合の観点からタイ語の普及を進めた[渋谷 1994:92]。

そのとき教育政策の対象とされたのは、学齢期児童あるいは青年層のみであった。タイ政府は 1979 年に、それまでタイ国民として認めていなかった山地民にも国籍（証明書）を与える方針を打ち出し、それにともない 1981 年に、タイ国籍を持つタイ国民に対する義務として山地民にも義務教育が普及された[渋谷 1994:93-94]。

このような山地民に対する教育政策では、国民統合という観点からは、山地民がタイ社会への理解を深め、愛国心を持った責任ある国民となることが目標とされ、タイ語やタイ文化の理解、タイ民族・仏教・国王への忠誠心の涵養が求められた。また開発という観点からは、タイ語の識字、保健衛生の知識、芥子栽培や焼畑農耕にかわる農業経営や、農業以外の分野で働くための技能の習得などが強調された[渋谷 2007:324]。

1980 年代以降は山地民の教育は国境警備隊ではなく、文部省管轄下の国家初等教育委員会が中心的に担い、一般のタイ人に対するものと同様の教育を行うようになった。そして、このころからタイの行政や経済の影響が山地に浸透していった。それにしたがって、山地民の学校教育への関心が高まった。教育政策が始まった当初、山地民の多くは教育を受ける意味を見出すことができず、むしろ学校やタイ人教員に対して不信感を抱いていた。親にとっても子どもが学校に行く必然性が見出せず、むしろ重要な働き手を奪われるという感覚が強かった。しかし、1970 年代後半から、平地と山地を結ぶ車道が整備され、それによって「僻地」であった山地民の村落と平地のタイ人社会や政府機関などとの接触が増え、タイ語や新しい知識の必要性が広く認識されるようになった。また焼畑耕作の禁止による農地の疲弊により山地での農業経営が難しい、生活の変化によって現金収入が必要であるなどという理由から、タイの学校へ行きタイ語を修得して、平地での職を得ようとする者が増加したことが、教育普及の背景として挙げられる[渋谷 2007:325-326]。

渋谷によると、1979 年に 4 万人であった就学児童数が、1986 年には 7 万 5,000 人になり、1995 年には初等教育段階が 12 万 6,961 人、中等教育段階が 1 万 5,030 人、ノンフォーマル教育での学習者が 1 万 2,433 人の計 18 万 5,855 人となり、これはタイ国内の山地民人口の約 23.5%にあたる。学齢期児童の就学率は 76.85%であり、若い世代を中心に就学者が増加し、教育を受けた山地民が急増していることがわかる[渋谷

2007:327]。現在、山地民が教育を受ける機会とタイ人と接触する機会が増えたことで山地民の多くがタイ語での会話が可能となった。たとえば、小川が2002年に調査を行ったチェンライ近辺の4つのラフ族の村では、1987年に調査した際には全くいなかった学生数が、全ての村で増加したという結果が表れた[小川 2005:104-107]。また、川瀬と野元が北部タイ、チェンマイ県に隣接するメーホンソン県⁽¹⁶⁾において行った調査⁽¹⁷⁾によると、この15年～20年の間に山地民が教育を受けるようになったこと、出稼ぎや山地内への道路建設で低地とのコンタクトが容易になったことなどで、タイ語が浸透していき、特に若者を中心に山地民のタイ化が進んでいるという結果が出た[川瀬・野元 2009:44]。同じくメーホンソン県で、佐俣と川崎が調査を行うカレン族の住むバン・メーチャン村では、日常的にポー・カレン語が使用されるが、村で小・中学校教育を受けられるようになった若い世代はタイ語を使いこなせるという[佐俣・川嶋 2004:93]。さらに、速水が調査を行っているチェンマイ市街地から北西へ100 kmほど行ったカレン族の村では、1980年代から1990年代にかけて、若者のチェンマイでの就労・就学率が急増した。この村は道路の整備が遅れた場所にあり、インフラも整っていない[速水 2005:40]。そのような村でも、山地民自身が学歴の重要性を認識し、せきたてるように子供を学校に通わせる親が出てきて、高校卒業の学歴を持つ若い村人が1990年代から急増したという。1980年代の終わりには、村でタイ語を話す機会は稀であった。特に女性たちは、北部タイ地域の男性が来ても、対面で話す事はほとんどなく、自分から北タイのことばを話すことはつつしみを欠く事でもあり、実際に聞いて理解できていても自分から言葉を返すことはほとんどなかったという[速水 2005:43]。年配の男性たちは、ほとんどがこの地域の共通言語である北タイ語をカタコトでも話せたが、読み書きは学校を出た者たちに任せていた。しかし1990年代に入ると、タイ語を流暢に話し、読み書きできなければ、とても対応ができない状況となったため、村長の年代もタイ語のできる若者となっている。地方行政との関わりでも、そしてより大きなタイ社会において、彼らが自らの主張を行い、交渉をする場面は日増しに増えており、複雑化もしている[速水 2005:42-43]。このように、タイ語を話せるということは山地民にとってますます重要なものとなってきている。

タイ政府が共産主義勢力の浸透阻止とタイ国家への同化を目的に始めた「山地民」への教育政策により、タイ語を話せるようになった山地民は、タイ国家への同化とともに発言の機会を得て、自らを主張できるようになった。つまり、山地民にとって教

育とタイ語の普及は、タイ政府の政策によって得られた太田や須永の言う「抵抗」のきっかけであると言える。

(3) 「山地民」イメージの変化

トレッキングツアーを扱う旅行代理店は 1980 年代から 1990 年代にかけて急増したが、タイ人ガイドの多くは「手軽に始められる」、「外国人相手なのでもうかる」という理由から観光産業に参入していった。ここで豊田は、「山地民の文化・社会に対しては、一般タイ人同様、無関心で無知なことが多いため、タイ社会で広く知られている『山地民』のイメージに頼って情報を提供しているものと考えられる」[豊田 1996:121]と述べている。確かに、旅行代理店の窓口で筆者が「山地民はどういう人びとなのか」と質問をしたところ、詳しく答えられる人は全くいなかった。ただツアーの説明に最低限必要と思われる、山地民の住む村の場所の説明を受け、民族衣装を着た山地民の写真を見せられただけであった。

しかし、彼らが山地民に対して無知で無関心であるにせよ、教育を受け、「まともに」タイ語で話ができるようになった山地民が学校や出稼ぎのために平地へ下り、タイ人と接触する機会はこの 20 年の間に多くなった。それゆえ、タイ政府の政策によりタイ人の間に広まったネガティブな「山地民」イメージから、より実態に近いものへ変化してきているとも言える。「山地民自身も、近代化によりタイ化が進み、タイ語を話し、タイ人のような身なりをする若者が多くなった」[川瀬、野元 2009:44]と川瀬と野元が述べているように、筆者がある旅行代理店で話を聞いた際にも、そこのスタッフが山地民のことを「similar kind of look (タイ人と同じ見た目だ)」と答えていた。そして彼は、山地民が労働者として、あるいは採れた作物を売りにチェンマイの街にやってくる、その辺りにいてタイ人とほぼ変わらないということを説明してくれた。

さらにチェンライ県でインタビューに答えてくれたタイ人で、旅行会社を営む Nu さんも「もう若い山地民は村にはいない」と言っていた。20 年前にはチェンライの街ではほとんど見られなかった山地民が、現在では都市部に出てきてレストランやホテルなどで働いたり、または学校で勉強をしていたりするという。さらに彼は、アヘンを吸引し、仕事をせずに観光客が来るのを待ち、NGO からの援助を期待して何もしない山地民に対しては嫌悪感を抱いていた。しかし農作業やチェンライで働いて生計をたてている山地民もいて、山地民にはいい人がたくさんいるとも答えた。先行研究で

語られる山地民は、タイ人からの差別を受け、観光資源として利用されるだけの存在であった。しかし、Nu さんや Jaksuwan さん、その他の旅行会社へのインタビューから、現在ではタイ人にとって山地民の存在が「近く」なったために、以前のようなタイ政府の政策によって作られたネガティブな「山地民」イメージによる差別からの脱却をし始めているのではないかと考える。

また、チェンマイでの旅行代理店窓口へのインタビューの際、筆者が、「村は観光化されているのではないかと尋ねると、どの旅行代理店でも「いや、今はローシーズンだから観光客は少ない」、「他の旅行会社が行かない村に行くから大丈夫だ」という答えが返ってきた。このことから、「観光化」は「観光客がたくさんいる場所」という意味として捉えているようであると感じた。さらに「トレッキングツアーで訪れる山地民の村はもう本物（real）ではないのではないかと質問すると、「いいや、首長族の村以外は real だ」と答えた。チェンマイ県にある3つの首長族の村は、ミャンマーと隣接するチェンマイ県の隣、メーホンソン県から観光のために連れてこられた人びとが住む村である。ここに、観光客と観光ミドルマンとの間に「本物（real）」という概念の齟齬が存在する。観光客にとっての「本物」の山地民とは、人里離れた山の中での自給自足の生活など、伝統的で前近代的なイメージを含んでいるが、観光ミドルマンにとっては、観光によって作られた村は「本物」ではないが、もともとそこにあった村は「本物」であるという。つまり観光ミドルマンにとって、首長族以外は「本物」の村の「本物の」人びとであり、村に電気が通ってようやくTシャツを着てようやく、山地民は「本物」のまま存在し続けている。このように、トレッキングツアーが盛んに行われ始めて20年が経過する中で山地民の生活はタイ化し、トレッキングツアーを担う観光ミドルマンの世代も変化した。これらのことから、観光ミドルマンたちは観光客が抱くような、「伝統的な生活を送る山地民」イメージを持てなくなっている。観光ミドルマンは演出をするための材料（イメージ）を持たず、タイ化した山地民がすでに彼らの「本当の」姿になりつつあり、それゆえ先行研究で語られていた『山地民』イメージに翻弄される山地民」という構図が弱まり、観光ミドルマンも山地民も「山地民」イメージを強調して演出しなくなっているのである。

3. 山地民にとってのトレッキングツアーの意義

山地民が観光産業に関わるのは収入が期待されるからこそである。かつて、山地民

にとつての換金作物といえば芥子であったが、それは規制された。同時に市場経済が浸透した現在、観光産業が山地民の人々にとって重要な収入源となっている。山地民の観光に関連したさまざまな活動とは、手工芸品の製作・販売、宿泊、写真撮影をはじめとする多様なサービスなどである[片山 2006:129]。しかし、観光ミドルマンがトレッキングツアーで訪問する村の人びとに支払う代金はわずかであるといわれている[cf. 石井 2007; 片山 2006; 須永 2007]。トレッキングツアーにおいて山地民が得られる収益の内訳は、観光客が村で売っている土産物や飲料などの商品を購入した際の代金と、宿泊先の村であれば寝具のクリーニング代と称されるわずかな宿泊代のみである。宿泊先の村では観光客が泊まるたびに収入があるが、トレッキング中の途中休憩で訪れる村では、観光客が山地民の売の商品を購入することは稀であるため、トレッキングツアーからの収入はほとんど得られない。さらに観光客がやって来るかどうか、やって来ても商品を買うかどうかはわからないのである。このように安定した収入を得ることのできない観光産業は、山地民にとって良い収入手段であるとは言えない。

それゆえ、山地民はトレッキングツアーなどの観光産業で得られる収入をあてにしてはいない。さらに山地民にとって観光産業は主要産業ではないのである。つまり、トレッキングツアーに関わる山地民も観光を主な生業としてしているわけではなく、「あくまでも臨時収入を得られる副業として位置づけている」と Jaksuwan さんは言う。彼らは他に仕事を持ちながら、ついでにトレッキングツアーの休憩・宿泊先として場所を提供しているに過ぎないのである。筆者が訪れた村でも、男性が夕方暗くなってから帰ってきたり、また朝にはおばあさんと娘が働きに出て行ったりと、それぞれに別の仕事を持っていた。

また、トレッキングツアーにおいて、山地民は「山地民イメージ」を演出することを強要されない。それは第4章1節でも述べたとおり、トレッキングツアーがシステム化され、次から次にやって来る観光客に対して山地民が手厚くもてなす(演出する)理由がなくなったこと、また2節で述べたように、観光ミドルマンの山地民に対するイメージの変化によるものであろう。このように、山地民にとつてのトレッキングツアーは、村で暮らしているだけで臨時的に現金収入を得られる、いわば「当たればラッキーな副業」であるといえる。

しかし、もとは農業を主な生業として山岳地域で生活を送る山地民も、現在ではその生活形態が変わりつつある。山地民にとつての観光産業は現金収入のひとつの手段

であるが、Jaksuwanさんは「都市部に仕事があるならば、彼らは村での観光産業を辞めてそちらを行うだろう」と述べていた。先述したとおり、現在、教育を受けタイ語を話せる山地民の若者の多くが、平地に降り賃金労働についている。山地民にとっても、山地の村で農業と観光産業による不安定な収入より、平地での仕事による安定した収入の方が魅力的なのである。つまり、山地民にとってのトレッキングツアーの意義とは山地で生活する山地民の臨時収入という「金銭的価値」でしかないということである。そこに山地民独特の「伝統的」な生活スタイルや民族としてのアイデンティティなどの文化的価値に対する意識は、可視的には感じられない。それは山地民が物質的に近代化・タイ化したためであり、このような状況においても彼らは山地民としての生活や誇りを我々に見えない形で抱いているのかもしれない。現在、タイ政府によって「山地民」という立場に置かれている彼らにとって、貨幣経済社会のタイでタイ人のように生活していくためには、山地民の文化的価値を守ることではなくまず収入が必要なのである。したがって、やはり山地民にとってのトレッキングツアーは、あくまでも副業として収入を得る手段のひとつなのである。

また、なぜトレッキングツアーに山地民の村を訪問するメニューが含まれているのかというと、森林の中に住む山地民の村はトレッキングツアーにおける宿泊先として利用しやすい場所にあるためである。Jaksuwanさんの話によると、タイ人にとって森の中での野宿やキャンプは考えられないことであるという。なぜならタイのジャングルには危険な動物が生息し、その中で眠るということは自殺行為だからである。ガイドはそのような危険に観光客をさらすわけにはいかない。そのような考えのもと、森林の中を何日も歩くトレッキングツアーにおいては、その行く先々に点在する山地民の村で休憩し、宿泊することは当然の行為と言える。

上記のことから、トレッキングツアーに山地民が携わっているのは旅行会社の都合からであり、山地民にとってのトレッキングツアーの意義は、わずかではあるが臨時的な収入を得られるという金銭的価値に集約される。

第5章 結論

第4章で述べたとおり、山地民にとっての観光産業の意義は金銭的価値でしかない。現在のトレッキングツアーはマスツーリズム化しつつあり、手軽な「秘境感」を求めてやって来る観光客が主である。そしてその観光客らが求める「秘境の雰囲気を感じる旅」の舞台であるタイのジャングルに関しては、タイ政府が法的に保護していくことは間違いない。

このジャングルという観光資源がある限り、観光ミドルマンはトレッキングツアーを運営し続けることができ、それは今後も山地民の村が休憩や宿泊のために、トレッキングツアーのアクティビティとして組み込まれるということでもある。またマスツーリズム的なトレッキングツアーにおいては、観光資源としての山地民が近代化・タイ化し、「山地民」イメージを演出せずとも、システム化されたトレッキングツアーの流れによって観光客は山地民の村にやって来る。つまり、今後もトレッキングツアーに携わる山地民は存在し続けるということである。

しかしそこにおける山地民は、観光資源としての「山地民」イメージで語られるものではなく、村は単なる「休憩・宿泊施設」となっていくであろう。現行のトレッキングツアーにおいて、山地民も観光ミドルマンも「山地民」イメージを貫いてはいない。このように、山地民の文化的価値に重点を置かないトレッキングツアーという山地民観光において、山地民の近代化・タイ化は止めることのできないものとなってきている。

トレッキングツアーにおける観光ミドルマンは、観光産業における山地民の文化やアイデンティティという観点には、ほぼ無関心である。もし山地民の文化的価値に関心があるのなら、近代化により失われていく観光資源としての「山地民の伝統文化」を必死で守っていこうとするだろう。しかし実際に観光ミドルマンがしていることは、できるだけ近代化されていない村を探してトレッキングツアーに利用し、ある程度近代化されたらまた次を探すという、観光資源の「使い捨て」である。さらに観光資源の保護に大きな権力を持つはずのタイ政府でさえも、山地民を対象とした観光や彼らの文化的価値の保護には表立って手を出すことができない状態にある。なぜなら第2章で述べたとおり、タイ政府と山地民との間には、国籍付与や森林保護による焼畑の

禁止などの問題がいまだに山積みであるためだ。さらに、タイ政府にとっては、山地民の伝統的な文化の保護よりも、タイ国家への同化政策の方が急務なのである。このように、北部タイの「山地民観光」にたずさわる人びとがその文化的価値に重点を置いていないために、トレッキングツアーにおける観光資源としての「山地民」が、その姿を失いつつある。

しかし、タイ政府も観光ミドルマンも、山地民の文化的価値に重点を置いていないということは、同時に山地民が自身の文化を自由に扱うことができるということでもある。また観光において金銭的価値を与える観光客は、山地民が近代化・タイ化し変容している現在においても、変わらず「山地民」の文化的価値を求めているのである。観光客がタイを訪れる限り、「山地民」の「幻影」を求める観光客は彼らに金銭的な価値を与える。つまり、山地民自身が彼らの有する文化によって得られる観光客からの金銭的価値を再確認し、今後新たな「山地民観光」を作り出すことが可能なのである。そしてそれは観光客が満足する限りにおいて、山地民自身がいかようにも操作・商品化できるだろう。

これまで、山地民を観光対象とする観光では、その観光対象を抜きにして観光の形態が決められ運営されてきた。しかしその間に山地民は教育を受けタイ語を話し、タイ国家社会の中でも発言する機会を得られるようになってきている。そうする中で、新たな「山地民観光」を担える力も備わってきているだろう。Jaksuwan さんの旅行代理店でガイドとして働くカレン族の少女は「将来、自分の村で、自分たちの力で観光ツアーを運営していきたい」と述べていた。今後、「山地民」に金銭的価値を与える観光客が満足する限りにおいて、彼らは自身の文化やアイデンティティを利用していくことができる。それは伝統的な山地民を演じるテーマパークであったり、森での暮らしを体験するツアーであったり、あくまで副業として観光に接するだけであるかもしれない。その全てを決めていくのは山地民自身である。

以上述べてきたように、近代化・タイ化を経て変容してきた「山地民」が、さらにこれからどのような変容を遂げていくのか、今後も筆者自身の旅を通して追い続けたい。

注

(1) タイ人は上座部仏教を信仰し、国王を崇拝する文化を持っている。国内には多くの仏教寺院がある。また舞踊や、トムヤムクンに代表される酸っぱい・辛い・甘い共存するタイ料理などが、タイ文化として挙げられる。

(2) 観光ミドルマンについては第1章2節に述べたとおりである。

(3) 1990年代後半から、NGOと山地民のひとつであるタイに住むカレン族とが協働で行っている新たな観光実践。観光を地域社会のイニシアティブのもとに行うこと、そして「ローカルな知恵にもとづく持続可能な森林利用」を外部者に伝達する手段として、観光を利用するということを目的に始められた。

(4) 在京タイ大使館ウェブサイト <http://www.thaiembassy.jp/rte1/> より。

(5) 外務省ウェブサイト <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/index.html> より。

(6) TAT ウェブサイト http://www2.tat.or.th/stat/web/static_index.php より。

(7) 1960年代ごろからの環境意識の高まりにより、次第にその厳しさを増してきた[santita 1996:261]。この動向に伴い、保護森林地区(protected forest zone)に指定された山間部森林地域に居住する山地民が、強制的に立ち退きを求められるケースが、折々問題化している[佐俣、川嶋 2004:98]。

(8) さくらプロジェクトホームページ <http://www.chmai.loxinfo.co.th/~sakura/> より。

(9) チェンライでのトレッキングツアーはチェンマイに比べると小規模であるが、より大自然を求めるならばチェンマイよりもチェンライでのトレッキングツアーに参加の方がよいと、筆者はチェンライの旅行代理店でのインタビューの際に聞いた。しかし、ローシーズン(5月~10月)は観光客の集まりが悪いため、筆者が聞き取り調査を行った10月には、どこもグループ参加のトレッキングツアーは行われていなかった。ただし、個人である程度ルートを決めて行くプライベートツアーは予約が可能であった。チェンマイではローシーズンでも毎日多くの観光客がトレッキングツアーに参加している。

(10) 蘭はタイの国花である。海外で栽培されていない、珍しい蘭を観賞できる場所である。全てビニールハウスで囲まれており、規模は小さく、さほど興味のない人であれば10分程度で全て周れ、十分に楽しめるほどの大きさである。

(11) ミャンマーからの移民で、タイ国内ではチェンマイに 6 つの村があり約 2000 人が暮らしている。女性が腹の部分にアルミや籐製の輪を何重にもつけていることが特徴的である。

バンコク週報

<http://www.bangkokshuho.com/archive/2007/oldcolumn/chaingmai/1282.htm> より。

(12) 筆者らが訪れたこの村は、観光客の宿泊のために作られたもので、実際の村からこの家族だけが連れてこられ、暮らしている。パロン族村の一部を切り取ったものである。

(13) 観光産業においては女性が使われることが多い。観光産業でしばしば強調されて利用される民族衣装は女性の方がきらびやかで特徴的であるため、男性は観光の場面でほとんど「山地民」として表には出てこない。

(14) 1980 年代後半から 1990 年代前半にかけて、ミャンマー内で激化した内戦のあおりを受けて逃れてきた難民である。その衣装の類似点が見られるためしばしばパドウン・カレン族と呼ばれるが、彼らはカレン族ではない。女性は小顔で首が長い事が美しいとされており、真鍮のコイルを首に巻き首を長く見せているため、その風貌から観光の現場では「首長族」と称される。しかし、医学的には首が伸びているのではなく、コイルの重みで肩が下がっているだけである。

彼らは難民であり、その多くはミャンマーで生まれた者であるため、タイ政府は村内に住むための許可証しか与えていない。そのため決められた場所でしか生活ができず、一部、タイに長く住んでいる者や、タイに生まれたものにはグリーンカードが与えられるもの、移動の自由は地域内(メーホンソーン県内)に限られている[須藤 2008:60]。また、その変わった風貌を観光資源として利用するタイ人経営者らが彼らを取りまとめ、村を作って観光客を呼び寄せているのも事実である。この村は難民キャンプ首長族の村はメーホンソン県(チェンマイからバスで 8 時間の場所にある、ミャンマーに接する県である)に 3 つ、チェンマイ・チェンライ地区に 3 つ存在、またミャンマー側のタチレクに 1 つ存在する[須藤 2008:52-53]。彼らは以前、メーホンソンにしか住んでいなかったが、メーホンソンへの交通アクセスの悪さから、観光客が訪問しやすいチェンマイに連れてこられ、出稼ぎを始めた経緯がある。村に入るには入場料が必要となり、規模により 200 バーツから 500 バーツの入場料を払う。これらの料金は、村の改善費用や、村人に支給される米などに使われると経営者は言っているが、実際

のところはわからない。村を経営するタイ人はいわゆる「ヤクザ」であると他の旅行会社のタイ人から聞いた。彼らは難民であるがゆえに、主張ができず、本論で扱っている山地民よりも問題を抱えている。

また、見世物になっている現状を「human zoo」であるとして国際団体が批判をしている。

(15) 米の麺のタイ風ヤキソバ。屋台でも 10 パーツ (30 円) ほどで売られており、どこでも見かけるタイ人の日常食である。

(16) ただし、プライベートツアーでは旅行代理店と話をしながら個人でアレンジを加えることは可能である。しかしその料金はグループを組んで行う通常のトレッキングツアーの 3 倍にもなる。また、筆者が確認した限り、プライベートツアーを行える旅行代理店は少数で、そのほとんどが日本人を相手にし、日本人のスタッフを置いている代理店であった。

(17) チェンマイ県に隣接し、西側にミャンマーと国境を接する。

(18) 2007 年にカレン族、シャン族、モン族、2008 年にシャン族、パオ族、カレン族、モン族の村を訪問しての聞き取り調査である。焼畑が禁止されて以降の山地民の変化を調査するため、①村の過去・伝統文化、②生業・焼畑、③森林の変化・周囲の環境の変化、④近代化、という内容で調査を行った[川瀬、野元 2009:31]。

参考文献

綾部恒雄

2003 『タイを知るための60章』 明石書店。

綾部恒雄、田中真砂子編著

1995 『文化人類学と人間』 三五館。

綾部真雄

1990 「動態的民族誌への予備的考察－タイ山地民社会の事例から－」『民族学研究』
55(3):308-320。

石井香世子

2005 「エスニック・ツーリズムにおける観光と国家：北タイ山地民とトレッキング
グツアーの事例から」『NUCB journal of economics and information science』
50(1):13-20。

2007 『異文化接触から見る市民意識とエスニシティの動態』 慶應義塾大学出版
会。

石井香世子・チャイヤシット・アヌチットウオラウォン

2009 「タイにおける観光と少数民族：タイ北部「首長族」を考える」『グローバル
化とアジアの観光 他者理解の旅へ』 pp97-112 ナカニシヤ出版。

小川裕子

2005 「タイ北部居住の少数民族における就業形態の変容」『地域学研究』
(18):95-112。

太田好信

1993 「文化の客体化－観光を通じた文化とアイデンティティの創造－」『民族学
研究』57(4):383-407。

1998 『トランスポジションの思想 文化人類学の再想像』 世界思想社。

片山隆裕

2006 「タイにおける山岳少数民族ツーリズム－歴史的経緯、影響、そして持続可
能な観光開発の試み－」『西南学院大学 国際文化論集』21(1):113-146。

崎川勝志

- 2005 「タイ山岳地域における少数民族の教育意識の変遷ーチェンマイ県チョムトン郡 P 村の事例から」 『国際協力研究誌』 11(1):163-173。

佐俣留奈子・川嶋辰彦

- 2004 「山間地僻村における伝統的焼畑農耕と高齢者生活環境の変容 - タイ国北西部ポー・カレン族居住山村バン・メーチャンの事例 - 」 『学習院大学 経済論集』 41(2):89-106。

渋谷恵

- 1994 「タイにおける山地民教育政策の展開ー1992 年「高地における教育開発計画」分析にあたってー」 『比較・国際教育』 2:91-97
- 2007 「タイ山地民の教育」 綾部恒雄編 『世界の先住民族 ファーストピープルズの現在』 pp.320-331 明石書店。

須藤廣

- 2008 『観光化する社会 観光社会学の理論と応用』 ナカニシヤ出版。

須永和博

- 2004 「エコツーリズムのローカル化 - タイ北部山地カレン社会を事例として」 『立教観光学研究紀要』 (6):3-14。
- 2007 「新たな観光の創出 - コミュニティ・ベースド・ツーリズムという試み」 安村克巳・遠藤秀樹・寺岡伸吾編 『観光社会文化論講義』 pp.71-80 くんぷる社。

豊田三佳

- 1996 「観光と性ー北タイ山地女性イメージ」 山下晋司編 『観光人類学』 pp.131-140 新曜社。

橋本和也

- 1999 『観光人類学の戦略 文化の売り方・売られ方』 世界思想社。

橋本和也、佐藤幸男編

- 2003 『観光開発と文化 南からの問いかけ』 世界思想社。

速水洋子

- 2005 「タイとビルマのカレン」 綾部恒雄監修 林幸雄・合田瀋編 『世界の先住民族 ファースト・ピープルズの現在 2 東南アジア』 pp.35-48 明石書店。

藤巻正己・江口信清

2009 『グローバル化とアジアの観光 他者理解の旅へ』 ナカニシヤ出版。

古家晴美

1993 「『山地民』と『山の民』：北タイ『チャウ・カウ』研究への新たな視座を求めて」『民族学研究』58(1) pp.29-52。

安村克己

2001 『社会学で読み解く観光 新時代を作る社会現象』 学文社。

Transforming Tourist Resource

—Focus on the Trekking Tour in Northern Thailand—

In Northern Thailand, many kinds of hill tribe people live. They are ethnic minority called “Chaw Khaw” in Thailand. Now they are known as immigrant from South-east China or Burma. They have some political and economic problems. For example, forbidding slash-and burn agriculture that is their occupation, and not given Thai nationality from Thai government. Besides, through governmental policy about hill tribes’ development, they were gave some negative images like “communism”, “forest destroyer”, and “dangerous drug user”. So, hill tribes are disadvantaged in Thai society. But they are used for “Ethnic Tourism” by Thai people engaging tourism industry.

In ethnic tourism, researchers focus on disproportionate relationship between ethnic minorities and majority people. They say that, in Thailand, hill tribes and their unique cultures have been one of the main attractions for tourist. But this tourism is dominated by Thai people managing tour company, and there is no way to state tribes’ opinions to the tourism. Tour Company’s people make “hill tribe image”, and use this image at trekking tour. Nowadays, that image is not real, but tour company’s people direct that image for tourists. Because tourists expect to see “real” hill tribes, and that is same as “hill tribe image”.

However, I think these ideas are no longer apply to present ethnic tourism in Northern Thailand. That change has 2 points. First point is that trekking tour has got to be systematically, then at ones tourist and tour companies’ quality have changed. Second point is hill tribe people’s life styles. 30 years ago, they lived in the forest and unusual existence for Thai people. And a little hill tribes could speak Thai. But now, people who can receive education and speak Thai are increasing. Therefore, many hill tribes work for company in city, and Thai people have more chance to get to touch with hill tribes and the “hill tribe image” “change.

On the bases of these ideas, This Paper tries to feel out meaning that hill tribes have for ethnic tourism. And consider that how this ethnic tourism in Northern Thailand will change in the near future.

謝辞

筆者が2008年5月から12月にかけて東南アジアを中心に一人旅をし、タイで初めて少数民族というものに出会ったことが、この論文テーマのきっかけである。この旅がなければこのテーマの論文を書くことはなかっただろう。それゆえまず、休学して一人旅をしたいという筆者の希望に反対せず、送り出してくれた両親に感謝する。旅中には多くの心配をかけ、異国の地で不安な筆者をいつも電話やメールで応援し支えてくれた。サークルの友人たちには、残り1年の大切な活動期間を残しながらも筆者の事情を理解し快く旅に送り出してくれたことに感謝したい。そしてこの旅で出会った友人たちには、本当にお世話になった。「山地民」との出会いをくれたと同時に、楽しい思い出と貴重な経験を与えてくれた。

この論文の核となっているタイでのフィールドワークを行った際にもたくさんの方々にお世話になった。チェンライでインタビューに答えてくださった Jaksuwan さんは、筆者の突然のお願いにも関わらず全ての質問に丁寧に答えてくださり、筆者の考えに新しい視点を与えてくださった。その他にも、同じくチェンライでインタビューに答えてくれた Nu さん、筆者の論文のためにと Nu さんを紹介してくれた友人、アンケートに答えてくれた観光客の方々、訪問した旅行会社の方々、トレッキングツアーと一緒に参加していた方々、多くのきっかけと出会いに感謝したい。

そして国際の友人、そして同じ関根ゼミの友人たちには、論文の体裁からその内容まで相談にのってもらい、またことあるごとに励まされ気持ちの面でもこの1年の論文生活を支えてもらった。

最後に、この論文を執筆するにあたり関根先生には大変お世話になった。筆者の的を射ない質問にも、いつもの的確で丁寧なアドバイスをくださり、なんとかこの論文を書き上げることができた。また、毎回あのような楽しいゼミを行うことができたのも先生のお人柄のおかげであり、関根ゼミで過ごせたことをとても幸福に感じている。3年間にわたりご指導いただいたことに、厚くお礼を申し上げたい。